

映画界の原真平——藤浪無鳴としての足跡を中心として—

松井孝翔

一、はじめに

昭和法難とは、大平宏龍先生によれば、教義綱要事件・曼荼羅国神抹消問題・各派合同問題・日蓮遺文削除問題の総称である。⁽¹⁾ このうち当時の本門法華宗では、教義綱要事件において、昭和一六年（一九四一）四月一日に三吉日照師・苅谷日任師・松井正純師・株橋諦秀師・小笠原日堂師・泉智亘師の六名が検挙され、病氣を理由に途中釈放された泉智亘師以外の五名はいずれも一〇〇日以上留置され、苅谷日任師・株橋諦秀師の二名は起訴となつた。この教義綱要事件の渦中において、精神面の支援者であったとされるのが原真平（一八八七～一九四五。以下、原氏と表記）である。

原氏は、この事件において事態の收拾を図つていた人物の一人である藤田晃道師（一九八九～一九八七）を経済的に支援していた塩田富造氏⁽²⁾（一九〇三～一九六五）を介して紹介された人物である。⁽³⁾ 昭和一七年（一九四二）四月二四日に事件の渦中にあつた関係者と合流した原氏は、法的対策のための神道や歴史、また法華經や日蓮聖人（一二三二～一二八二）、日隆聖人（一三八五～一四六四）に関する知識などを関係者に授けて裁判を指導した。このため原氏は、「内務省の情報局を完封したり、控訴院で無罪の大勝を博した事實は悉く先生の指導の結果と

謂うても過言ではない⁽⁵⁾』と評価されている。しかし原氏の生涯の多くについては、映画界の弁士として活動していた一面があつたことは知られていたものの、現在までその詳しい事情はほとんど明らかにされてこなかつた。本稿では、こうした原氏の家庭環境や弁士などの映画界における活動について、宗門内に伝わる資料や先行研究を再検討しながら、郷土史資料や映画資料など新たに筆者が発掘した資料を用いて、その実態の解明に迫りたい。

二、従来の研究における原真平の人物像とその課題について

私見では、宗門内でこれまでに知られてきた原氏に関する情報を掲載する文献は、以下の二つに大きく分類で
きると思われる。まず一つ目は、基本的文献と位置づけられる以下の文献^{(一)～(四)}である。これらは執筆者ないし
記録者も不敬事件の関係者である一方で、原氏と直接の交流があつた点が特徴として挙げられる。二つ目は、一
つ目に挙げた基本的文献に基づきながら、原氏について述べた文献^{(五)(六)}である。これらは先行研究として位置づ
けられるものと思われる。それらを挙げると次のようになる。

【基本的文献】

- (文献^(一)) 小笠原日堂『曼陀羅國神不敬事件の眞相』〔以下、^(一)『眞相』と表記〕
- (文献^(二)) 藤田晃道『宗門秘聞 不敬事件外伝』〔以下、^(二)『外伝』と表記〕
- (文献^(三)) 松井日宏「曼荼羅國神不敬事件で苦闘する本宗への則遣変化の人 原真平先生を追悼する—第三十七
回忌を迎えて—」〔以下、^(三)『追悼』と表記⁽⁶⁾〕
- (文献^(四)) 法華宗昭和法難五〇周年顕彰会編『護り貫いた信心の燈』〔座談会、松井日宏（正純）師談〕〔以下、^(四)

『信心の燈』と表記

【先行研究】

(文献⑤) 松井日俊「—崇高な護法愛宗の篤信者—嗚呼！原真平先生の生涯を追憶⁽⁸⁾」〔以下、⑤「追憶」と表記〕
(文献⑥) 石田日信「〔昭和法難・曼荼羅國神不敬事件〕彼我の群像⁽⁹⁾」「〔以下、⑥「群像」と表記〕

原氏の経歴についての詳細は、前述のように未だ不明な事が多い。だが、基本的文献や先行研究によつて、既に知られている内容もある。まずはこれらの基本的文献と先行研究にある情報を整理しながら、原氏の人物像について、時系列に沿つて確認しておきたい。

⑤「追憶」によれば、原氏は明治二〇年（一八八七）八月四日、長野県飯田市追手町の士族、原恤造⁽¹⁰⁾〔以下、恤造と表記〕と兼子の長男として生まれた。⁽¹¹⁾幼い頃から、原家の菩提寺である経藏寺へ祖母によく連れられていたという。勉学にもよく励み、独学で英語・ドイツ語・

フランス語・ギリシャ語・ロシア語・中国語を習得しただけではなく、東西各国の哲学や宗教も極めた上に、近世の政治経済や自然科学にも精通していたとされる。また乳牛の輸入に関わって成功した記述が郷土史に残されてゐるとも松井日俊師⁽¹²⁾（一九二三～一九四一。以下、日俊師と表記）は述べている。



【写真①】昭和19年（1944）初秋頃の原氏（57歳頃か）。〔『曼陀羅國神不敬事件の真相』挿絵頁〕

ただ、原家に関する情報については、文献によつて若

干の違いが見られる。一つは、③「追悼」には母親の名が加祿となつてゐるが、⑤「追憶」には兼子と記されている点である。これについては、経藏寺にある原家の墓を確認したとする日後師の記録によれば、「兼子」と記されていたという。よつてこれに依るならば、⑤「追憶」の表記が正しいことになるため、本稿では兼子としておきたい。なお兼子は士族市瀬四郎の長女であり、一八歳で原家に嫁いだ後、二三歳で長男の原氏を出産したものの、産後すぐに亡くなつたと伝えられている。⁽¹⁷⁾

もう一点は、原氏の出身地に関する内容である。③「追悼」には「大手町」とあるが、後に取り上げる郷土史資料には⑤「追憶」⁽¹⁹⁾と同様に「追手町」と記されている。だが、基本的文献や先行研究以外の資料である、明治三六年（一九〇三）年五月一九日の『官報』第五九六一號附録には、父恤造の住所として「長野県下伊那郡飯田町九八一番地」とあり、また昭和五年（一九三〇）七月発刊の『第三版 大衆人事録』には原氏の出身地として「長野県下伊那郡飯田町」と記されている。従つて『官報』や『第三版 大衆人事録』に依り、原氏の出身地は「下伊那郡飯田町」であると判断できる。⁽²⁰⁾

さて、上京後の原氏は、得意であった英語の勉強の一環として洋画専門の無声映画（サイレント映画）の活動弁士（以下、弁士と表記）となつたとされる。そればかりでなく、後にスター弁士となつた徳川夢声（一八九四—一九七一。以下、夢声と表記）や大辻司郎（一八九六—一九五三）が、やがて原氏の門下生になつたとも伝えられている。⁽²²⁾

その後の大正二年（一九一三）頃、原氏は東京渋谷に新居を構えたといふ。⁽²³⁾だが同年に息子の慎を、また大正九年（一九二〇）には妹の貞枝を失う。原氏は、この悲しみから脱するために弁士としての活動を引退した、と⑤「追憶」では述べている。そしてこれを機に宗教研究を始めることとなり、その関心も國家神道や国学などか

ら仏教研究へと移り、さらには幼少期に経藏寺へ通つたことが影響したのか富士派や国柱会にも出入りするようになり、ついには日蓮主義の研究を行うようになったという。そして大正二二年（一九三三）、関東大震災で被災した際に大阪へ移つたものの、ほどなくして東京へ戻り、熱心に日本史を学ぶかたわらで右翼の日蓮主義者や高級軍人と盛んに交流するようになる。⁽²⁴⁾

こうして高級軍人と付き合いはじめた原氏は、昭和一五年（一九四〇）九月三〇日に開設した遠藤喜一（一八九一～一九四四）を総裁とする陸軍の将校であつた高嶋辰彦（一八九七～一九七八）などのメンバーを有する総力戦研究所と関わるようになる。そして研究所の発行する機関紙に論説を発表するようになり、一方で高級軍人や参謀本部関係者も原氏から日蓮聖人の教えを学ぶようになったという。中でも高嶋辰彦は原氏を大変高く信頼したとされ、参謀本部内における一部の人からもブレーンのような存在として扱われるようになつたと見られてゐる。⁽²⁵⁾

その一方で原氏は、高嶋辰彦の奨めや映画会社からの依頼を受けて、フィルムの買い付けなどのために二度ヨーロッパへ渡つてゐる。そしてその折りには、アドルフ・ヒトラー（一八八九～一九四五）やベニート・ムツソリーニ（一八八三～一九四五）に法華経を説いたと○『眞相』では伝えられている。⁽²⁶⁾特にムツソリーニは原氏との出会いを非常に喜び、「イタリーでは仕方がないが、私も日本に生まれていたら、日蓮上人の門下になつていたに違ひない」と語つたとされてゐるだけではなく、自身のサイン入り写真を我が同志「カメラータ原」へと贈つたと④『信心の燈』や⑤『追憶』では述べている。⁽²⁷⁾

この他、昭和一〇年（一九三五）頃には世田谷玉川において舞踊研究所を所有した一方で、大日本映画協会の代表も務め、同時期に昭和神聖会映画部玉川研究所という組織の創立にも関わつたことなども、㊂「群像」によ

り知られている。⁽³⁰⁾

以上、基本的文献と先行研究に記された原氏の活動情報について整理を行ながら確認してきた。これらを通じて気づかされたことの一つは、原氏に関する伝える内容は、いずれも多くが基本的文献や先行研究で重複している点であり、大きな違いがほとんど見られなかつたことである。それはつまり、参照されてきた資料や情報源がほとんど同じものだつたことを示唆していると思われる。そしてそれらが伝えてきた原氏の前半生とは、長野県下伊那郡飯田町の出身で、乳業や牧場を生業とする環境で育つた後、上京して弁士として活躍したという、非常に概略的かつ断片的な内容にとどまるものであり、その詳しい実態の解明や意義付けなどは、未着手のままでつた。このため次章以降では、筆者が発見した新たな資料を用いながら、原氏の前半生についてさらなる解明と分析を試みたい。まずは原氏の家庭環境と少年時代から詳しく検討していきたい。

三、家庭環境と少年時代

原氏の家庭環境と少年時代を探る上で手がかりの一つになると思われるが、以下の日俊師の⑤「追憶」に見える「郷土史」というものである。〔※筆者注、傍線は筆者による〕

中学を卒業し、しばらく家業の乳牛牧場と牛乳販売商を手伝つておりましたが、向学心に燃えた青年原先生は東京へ出て、語学の勉強をつづけていかれました。そんなある日、父の牧場組合から、横浜で英國から牛を輸入する仕事を手伝つて欲しい、と頼まれました。「ぼくの英語が役に立つならば」と、横浜から飯田へ二頭の乳牛の移送の手伝いに成功しました。当時は馬が畜産のトップだつただけに、その後の飯田の畜産

発展に貢献したと、郷土史に、原先生の名前がでているとのことです⁽³¹⁾

ここに記されている「郷土史」とは、果たして如何なるものであろうか。ここには単に「郷土史」とあるだけで、具体的な文献名は挙げられていない。これについて筆者が調査した所、原家や原氏に関する記述のある郷土史⁽³²⁾として、村沢武夫氏の『郷土のキリスト教』、同『飯田の芸能人二』、同『伊那の芸能』、そして山本脩平氏の「下伊那飯田に於ける明治・大正乳業の歴史』(以下、「乳業の歴史」と表記)を見出すことができた。よってここでは、日俊師の述べる郷土史がこれらの文献であると仮定した上で、郷土史に示される原家や原氏の活動などについて、改めて詳しく見ていただきたい。

さて、前述の村沢武夫氏の『伊那の芸能』などによれば、明治二七年（一八九四）頃に既に乳業を営んでいたと見られる原家は、大正の初め頃には現在の長野県飯田市追手町六三〇で約一五〇〇坪の敷地を有するなど、下伊那地方でいち早く牛乳販売を始めたとされている⁽³³⁾。これらによれば、原家の営んだこの牧場は、「二之丸牛乳」「原牛乳」などと地域住民から呼ばれていたが、正しくは「富仙館」という名称であったという。この富仙館を営んだ髭の立派な格好の良い人物こそ、原氏の父親の恤造であつた。⁽³⁴⁾

幼少期の原氏については、「金星」という雅号を用いた文学少年として地元新聞に文芸作品を投稿したことが伝えられている⁽³⁵⁾。また明笛という竹笛を飯田に初めて持ち込んだ人物でもあつたとされている。

ところで前掲の日俊師の記述には、原氏が上京後に英國から輸入した二頭の牛を横浜から飯田まで移送するのを手伝つたとあつたが、この点に関しては、これらの郷土史には見当たらなかつた。ただ、それと非常によく似たエピソードが、依田陽治氏の『竜峠のホルスタイン 伊那の酪農追想の記』に次のように記されている。

下伊那に初めて乳牛が導入されたのは明治13年、西尾義雄、遠山正次郎、信濃屋源吉氏等により、横浜より

牡牛と牝牛5頭を買い、長い路を歩かせて飼い方も知らない者が幸いてきたので、途中で3頭死に、2頭が飯田に着いた。⁽³⁶⁾

これは明治一三年（一八八〇）に下伊那地方へ乳牛が初めてたらされたことに關する記述であるが、原氏は上述の通り明治二〇年生まれであるため、日俊師の記述とは年代が合わない。またこれとよく似た別の話が、父恤造の逸話として「飯田の芸能人一二」で次のように述べられている。

明治の初めころ西尾義雄、信濃屋の源吾らと、横浜から乳牛五頭を買ひれ、追手町の現在長姫高校あたりで、原乳業店と云う、当地方で一番早く牛乳屋を始めた人⁽³⁷⁾

この二つの記述を比較したところ、年代や登場人物などがよく似ており、なおかつ後者の「飯田の芸能人一二」では、原氏を紹介する上での父恤造の逸話として記載されていた。ではこの二つの内容はどちらが正しいのだろうか。

一九三〇年に出版された『第三版 大衆人事錄』によれば、原氏は明治三六年（一九〇三）に旧制飯田中学を卒業後、明治四一年（一九〇八）頃まで家業の手伝いをしていたとされている。⁽³⁸⁾しかし別の話として、明治三六年頃に家業を嫌つた原氏が弁士となつて家を出て行き、残された父恤造だけでは乳業ができず、従業員の龜山喜之助が牛四頭、馬おけ四つを引き連れて江塚という場所で新たに牛乳屋を始めた、という記述が「乳業の歴史」にある。⁽³⁹⁾原氏が上京した正確な年月は不明ながら、明治四一年頃には、下伊那地方でも乳業が広く根付いたとされていることも含めると、背景の事情と合わない面が出てくる。よつて日俊師の記した内容については、更なる資料の調査と整理を行う必要があると思われるため、今後の課題としておきたい。

また前述した村沢武夫氏の『郷土のキリスト教』には、明治二七年七月の時点で、原家がキリスト教徒であつ

たという興味深い内容を伝えている。⁽⁴⁰⁾ この資料は、原家に関する他の郷土史資料よりも刊行年が早い。だが、その後に刊行されている他の資料では、日蓮宗寺院の経藏寺が原家の菩提寺であると伝えている。そして、同じ村沢武夫氏による『伊那の芸能』には、原家がキリスト教徒であったとする記述は見られない。原家の信仰の問題については改めて確認する必要があるが、原氏が経藏寺に建立した墓には「二世眞平建⁽⁴¹⁾立」とあることから、恤造の代に日蓮宗へ改宗した可能性も考えられることは、指摘しておきたい。

四、活動弁士としての活動について

さて前章で確認したように、原氏は明治四年（一九〇八）の二一歳頃には上京していると考えられている。本章ではそれ以降の原氏の活動について、映画関係の資料も用いながら検証していく。

『キネマ旬報』などの映画関係資料によると、弁士を目指した原氏は、地元長野ではクラリネットの演奏を練習していた。そのような原氏が上京を志した理由は、先述のように家業を継ぐことを嫌ったからだという。上京後の原氏は、外染井平和館を経営し、後述するM・パテー商会で弁士を務めていた千代田鶯谷（一八八五～没年不詳）⁽⁴²⁾と知り合うことになる。原氏はこの千代田鶯谷よりM・パテー商会の主任弁士を務める先輩の岩藤思雪（一八七九～一九三八）を紹介された後、岩藤思雪を介して当時M・パテー活動写真会の親玉と言われていた水書未狂（生年不詳～一九三二）に預けられた。

原氏が弁士の道を志望した動機としては、英語が得意であつたことが挙げられる。⁽⁴³⁾ 当初は映画会社の依頼を受けて外国语小説の翻訳を行っていた原氏が、後に弁士へと転身していくのは、人前で顔を見せたくないという

ことがあつたからであり、なおかつ英語の勉強もできるためであつた。⁽⁴⁴⁾

原氏が映画界に登場し弁士としてデビューしたのは、上京の翌年と思われる明治四二年（一九〇九）一二月三〇日、東京牛込・文明館における映画説明であつた。⁽⁴⁵⁾ 当時二三歳の原氏は原藤月という弁士名を名乗つていた。この文明館での映画説明は大変好評となり、文明館館主も原氏を気に入つたものの、M・パテー商会の都合により横須賀・谷川館への移動となる。この移動により東京を離れた原氏は、不遇の三年間を過ごすことになる。原氏はこうした不遇の時期に、いずれ必ず活躍することを誓い、鳴かず飛ばずの思いで趣味と夢に近い理想を抱きながら、徹底した実地映画の研究に没頭したという。そしてこの経験から、原藤月より藤浪無鳴（ふじなみむめい）⁽⁴⁶⁾（藤波ム明、藤波無鳴とも）へと改名した。ただし改名した正確な時期は、現在のところ不明である。

では鳴かず飛ばずの原氏がその後に著名な弁士へと大きく変わつていったのは、何がきっかけとなつたのだろうか。それは、大正元年（一九一二）九月一七日、横浜ゲーテー座で上映されたイタリア映画『クオバチス』の試写会において、明治四二年に横浜オデヲン座を創立したドイツ人貿易商リチャード・ワダマン（生没年不詳）と出会つたことだつた。この出会いが、原氏の弁士生活を大きく変える出来事となる。

原氏は横浜ゲーテー座で『クオバチス』を鑑賞した後、同じく鑑賞した弁士の世波田如水（一八八一～没年不詳）と映画の感想について議論を交わした。その議論の中で原氏は、特に映画の脚色について褒め称えた。その時に偶然通りかかったワダマンから、映画には脚色が加えられてはおらず、原作通りの内容であつたと告げられたといふ。原氏は有名な原作を知らなかつたという出来事を非常に恥ずかしく感じ、弁士という職業は多くの勉強をしなければ務まらないと思つたとされる。これを機に一念発起した原氏は、翌日には上京して『クオバチス』の古本と英訳本、さらには和訳本を購入し、『クオバチス』の原作である『何處へ行く』の研究を始めた。

こうして『クオバチス』の説明を物にした原氏は、翌二年より同作品の帝国劇場専属弁士となつた。⁽⁴⁷⁾

このように無声映画界で評価の高まつた原氏は、藤浪無鳴の名で活動しただけでなく、後に無声映画界を代表するようになつた夢声や生駒雷遊（一八九五～一九六四）の先生格でもあつたとされる人物となり、当時の日本三大弁士の一人と称されるようになる。⁽⁴⁸⁾一方で原氏は、日蓮宗に凝つていたという理由から「お上人」という綽名が付けられたとも伝えられており、興味深い。⁽⁴⁹⁾

ところで原氏は、弁士としてM・パテー商会という団体の弁士養成所に所属していた。M・パテー商会は、近代中国の辛亥革命後に南京の中華民国臨時政府で臨時大總統となつた孫文（一八六六～一九二五）に多額の金銭援助をした実業家の梅屋庄吉（一八六八～一九三四。以下、梅屋と表記）により、明治三九年（一九〇六）六月頃にM・パテー活動写真会として創立されたものである。翌四〇年（一九〇七）に、M・パテー商会と改名し、東京麹町区三番町六三番地に事務所が設置された。同地では弁士養成所も併設され、岩藤思雪・水書未狂・西村楽天（一八八五～一九五四）・茂木天洋（生没年不詳）・中川濤声（生没年不詳）・千代田鶯谷・雨宮桃村（一八八五～没年不詳）・古川緑水（生没年不詳）・菊川栄喜（一八七二～一九一七）・米田東洋（生年不詳～一九二三）・西郷了堂（一八八七～一九五一）などの弁士が在籍した。この養成所については、片岡一郎氏が次のようにその様子を述べている。

養成所の機能は新人を育成するというよりも、思雪を先頭に、弁士たちが互いに技術や思想を伝え合うようなものであつたと予想される、博物作品を積極的に上映していたM・パテーでは、知識の共有が重要であつたのだろう。⁽⁵⁰⁾

この見解が正しいのであれば、原氏は養成所に入所した時、既に弁士としての能力をある程度有していたと推測

できる。

また当時の映画界は、弁士の前身に基づいて三つの時期に分類される。⁽⁵⁴⁾ その三つとは、浪人上がり、芸人上がり、学生やファンから弁士になった者である。原氏が弁士となつた時代は浪人上がりの全盛時代とも言われ、特にM・パテー商会には様々な経歴の者が集まり、刑事に尾行される者までいたという。

例えば、原氏が身を寄せたM・パテー商会の創立者である梅屋の人物像やその周辺の雰囲気について、吉田智恵男氏（一九一五～一九八八）は次のように述べている。

梅屋庄吉には大体梁山泊主人を自任するようなことがあつた。孫文の世話をしたのもその現れだろう。活動写真興業者になつてからも親分的な性格は変らず、そのため彼のまわりにはいろいろな理由で世に入れられない青年たちが集まつた。⁽⁵⁵⁾

このように梅屋の周辺には、様々な理由で世間からあぶれた青年たちが集まつていた。また養成所に所属した弁士は、給料以上の小遣いを梅屋から受け取り、その関係はまるで親子のようであつたとされている。よつて養成所には、活気に溢れた若い才能が集まつたといふ。こうした人柄であつた梅屋の聲咳に触れたことは、原氏の青年時代やその後の人生において、大きな影響を与えたのではないかと推測する。⁽⁵⁶⁾

そしてM・パテー商会において水書未狂の門下生となつた原氏は、後に門下の出世頭となつたといふ。⁽⁵⁷⁾ 弟子には、松平鶴声・東金太郎・鹿島喜久水（いずれも生没年不詳）・渡邊春波（一八九七～没年不詳）などがいたようである。

またM・パテー商会は、明治四〇年から大正元年までの約五年間に、次の略年譜①のように多くの映画館を続々と設立している。

【略年譜① M・パテー商会設立の映画館（一九〇七～一九一二）】

明治四〇年（一九〇七）大阪千日前・文明館。

明治四一年（一九〇八）名古屋大須・電気館、東京浅草・福寿館、東京浅草・大勝館、名古屋大須・文明館、東京牛込・文明館（第一文明館）、東京麻布・第二文明館、大阪千日前・第二世界館、横浜伊勢佐木・電気館。

明治四二年（一九〇九）東京上野・第一競争館、大阪千日前・三友俱楽部、東京浅草・旭館（記念大勝館）、東京日本橋・水天館、東京本所・第一赤館、東京本所・太平館、東京麹町・番町演芸館、東京深川・桜館、東京深川・豊年館、東京品川・ハツ山活動館、東京本所・大和館、東京四谷・福寿館、東京深川・寿館、東京神田・敷島館、東京本郷・真砂館、東京神田・天下座、東京小石川・パテー館。

明治四四年（一九一二）東京赤坂見附・万歳館、熊本・熊本電気館、東京浅草・パテー館、京都新京極・パテー館、大阪千日前・帝国館、横浜伊勢佐木・オデオン館。

明治四五年（一九一二）仙台・仙台パテー、東京浅草・浅草国技館。

以上のように、M・パテー商会は系列映画館を多く所有したことから、弁士養成所在籍中の原氏は、これらの映画館で活躍したことが推し測られる。⁵⁸

一方、M・パテー商会の特色的な活動として、孫文の撮影が挙げられる。明治四四年（一九一二）四月頃、M・パテー商会は経営債務を整理し、新会社エム・パテーとなつた。辛亥革命の起つた同年一〇月頃には、梅屋が自ら中国へ渡つており、アメリカで革命支援を訴えていた孫文のために、革命軍と清軍との戦いを各地で撮

影している。また翌四五年一月一日に開催された孫文の南京入場式典を撮影した革命映画も制作した。そして孫文が来日した大正二年二月には、東京浅草・大勝館でそれらの上映会をしている。⁽⁶⁰⁾ エム・パテーが辛亥革命の戦闘の様子を撮影したことや、その後の孫文の動向を撮影したことは、原氏にとつて孫文や近代中国の革命運動を比較的身近に感じさせたものとなつたことを想像させる。

だが、孫文への経済的支援を行つていたエム・パテーは、次第に経営が悪化する。そして大正元年九月に、吉沢商店、横田商会、福宝堂の三社と共に統合し、日本活動写真株式会社「以下、日活と表記」⁽⁶¹⁾が設立されることとなる。⁽⁶²⁾ だがしばらくすると、経営陣の対立する問題が発生し、取締役であつた梅屋は辞職することになつた。⁽⁶³⁾ しかしながら梅屋は、大正三年（一九一四）にM・カシー商会という新たな映画会社を設立する。その一方で、日活に所属していた小林喜三郎（一八八〇～一九六二）が天然色活動写真株式会社を設立するなど、映画界は新たな局面を迎えることとなる。⁽⁶⁴⁾ ただし大正三年に第一次世界大戦が勃発して日本も参戦するようになり、世界情勢も不安定な時代に突入していくことにもなる。では原氏は、こうした状況下においてどのような活動をおこなつたのであろうか。

原氏はこの頃、横田商会の東京支店長を務める伊藤伊八（生没年不詳）と知り合い、その縁もあつて横田商会へと移籍している。この頃の横田商会は前述したようにエム・パテー、吉沢商店、福宝堂との統合が進む最中であり、横田商会への移籍後、原氏は統合会社である日活の弁士となつた。⁽⁶⁵⁾ なお原氏の入社は大正二年の二六歳頃であり、翻訳係として日活より辞令を受けている。⁽⁶⁶⁾

一方、当時の映画上映は治安上の問題から所轄警察署からの検閲があり、映画館は興業台本を事前に届け出る必要があつた。⁽⁶⁷⁾ 特に外国映画を上映する映画館では、外国语字幕の翻訳や日本語による題名の表記が求められる

ようになり、映画内容を精査して興業台本を制作するなど、大きな苦労を抱えることになった。博識であり英語も堪能であった原氏は、こうした当時に横田商会の興業台本制作で活躍した。

また日本映画史の分野における研究によれば、原氏が実際に活動していた映画館としては、在籍期間は不明なもの、横須賀・谷川館、浅草・吾妻座、浅草・金龍館、赤坂溜池・葵館、新宿・武藏野館、神楽坂・牛込館、帝国劇場、神田・東洋キネマ系の大正活映などが判明している。⁽⁶⁾⁽⁷⁾ これらのうち、浅草・金龍館は福宝堂（後の日活）、赤坂溜池・葵館は日活、新宿・武藏野館は大正九年に天然色活動写真株式会社を吸収して創立された国際活映株式会社の映画館として使用されていたことが分かっている。⁽⁶⁾⁽⁸⁾

他方で、原氏の活動時期や活動内容が判明しているものには、以下の略年譜②のように挙げられる。

【略年譜② 弁士としての原真平の活動時期・内容（一九〇九～一九二九）】

明治四二年（一九〇九）一二月三〇日〔二二歳頃〕、東京牛込・文明館での映画説明。⁽⁶⁾⁽⁹⁾

大正二年（一九一三）〔二六歳頃〕帝国劇場でイタリア映画『ボンベイ最後の日』。⁽⁷⁾⁽⁰⁾

浅草で『クオ・ヴァヂス』。
帝国劇場で『クオバチス』⁽⁷⁾⁽²⁾。

大正六年（一九一七）三月〔三〇歳頃〕、夢声と弁士を務めた帝国劇場で『シビリゼーション』。⁽⁷⁾⁽³⁾

七月下旬、相模常設館で『忍術十勇士』『首賣勘助』『女夫心中』『疑問の墓』。⁽⁷⁾⁽⁴⁾

大正七年（一九一八）二月一六～一七日〔三一歳頃〕、神田青年会館で櫻井南城と弁士を務める。⁽⁷⁾⁽⁵⁾

四月一七～二十四日、米沢市常磐館で武藏野館主任弁士として『シビリゼーション』。⁽⁷⁾⁽⁶⁾

九月上旬、牛込館で『オデット』。

大正一一年（一九二二）一月二七日〔三五歳頃〕、大正活映の東洋キネマで『歌劇ルクレツィア⁽⁷⁸⁾』。

東洋キネマで『駒鳥の舞』『ハリエット・アンド・パイパー』『マダムX⁽⁷⁹⁾』。

大正一二年（一九二三）〔三六歳頃〕評論「第八藝術の出生」を發表⁽⁸⁰⁾。

大正一三年（一九二四）〔三七歳頃〕武藏野館で『ブローケン・ブラッサム⁽⁸¹⁾』。

大正一四年（一九二五）三月〔三八歳頃〕、帝国劇場で『ダンテ地獄篇⁽⁸²⁾』。

三月一〇日、キネマ・タチバナで『バグダッドの盜賊⁽⁸³⁾』。

九月二六・三〇日、帝国劇場で『オペラの怪人⁽⁸⁴⁾』。

九月二八日、『アルツィゴーゴロ』のラジオ説明⁽⁸⁵⁾。

大正一五年（一九二六）一一月五日〔三九歳頃〕、論説「一九二六年の伊太利映畫界」を發表⁽⁸⁶⁾。

昭和二年（一九二七）六月一日〔四〇歳頃〕、横浜高等工業学校主催の映画会で『百萬人に一人の男』『野生

の叫び⁽⁸⁷⁾』。

九月二八日、『アルツィゴーゴロ』のラジオ説明⁽⁸⁸⁾。

昭和三年（一九二八）二月一四・一五日〔四一歳頃〕、全日本活映教育研究会関西本部の講習会に講師として参加⁽⁸⁹⁾。

七月二三日によみうり東京ラジオで『ムツソリーニとライオン⁽⁹⁰⁾』。

九月二三日、よみうり東京ラジオで『ベン・ハイ⁽⁹¹⁾』。

昭和五年（一九三〇）八月二十五日〔四三歳頃〕、内幸町大阪ビル「小笠原明峰渡米送別会」で小笠原長生（一八

六七・一九五八）と共に「日蓮上人に関する講演⁽⁹²⁾」。

これらの活動内容などから分かることは、原氏が担当した映画の多くは外国作品であるということである。この事は、原氏の語学力が優れているため、映画界でもその能力が重宝されていたことを示唆していると思われる。またこの他に、上映年などの詳細は不明ながら、原氏が行つた「説明」と呼ばれた映画の解説には、武藏野館での『風雲のゼンダ城』⁽⁹³⁾、帝国劇場での『ラ・ル』⁽⁹⁴⁾『女性の敵』⁽⁹⁵⁾『クオレ』⁽⁹⁶⁾、その他『嘘も語る』⁽⁹⁷⁾があることが分かつた。同一映画の説明回数の記録を保持していたという逸話も伝えられており、イタリア・ゲネス社の『クオバヂネ』⁽⁹⁸⁾は一九三回、M・パテー商会の『ミゼラブル』は一三七回と、それぞれ記録が残されている。

ところで原氏は、大正六年の三〇歳頃、映画上映前に観客の前へ姿を現して行う前説を廃している。これは学生間でインテリとして高く評価され⁽⁹⁹⁾、「活辯界の新知識」⁽¹⁰⁰⁾と称されていた。この前説を廃する手法は「パツと写し式」と呼ばれ、上映会場をいきなり暗くした後カーテンにタイトルが映し出されると共にスクリーンを出して上映を開始する、というものである。この手法は、略年譜②に挙げた『シビリゼーション』の上映の際に原氏が行つたものだった。それを、共に弁士を務めた夢声が、翌週に葵館で上映された『アイアン・クロウ』で自己流に再現したところ、好評を得た。そのため夢声がその手法の発案者だと捉える映画ファンも多かつたようで、夢声の地位向上に大きな影響を与えたようである。⁽¹⁰¹⁾そしてこの手法はその後、次第に全国各地の映画館で用いられるようになり、ついには弁士による前説は廃止となつたといふ。⁽¹⁰²⁾この出来事を、夢声は次のように振り返つている。

小生非常に先覚者のように見えるが、ここでちょっと内証に打明け話をすると——じつは、前説なしを発明した人は私ではない。例の藤浪無鳴氏は、以前から、気が向かないときキナリ暗くしてのパツと写しをまれに用いることがあつたんである。「シビリゼーション」帝劇封切りも、藤浪氏が十巻のうち七巻を担当し（小

生はその三巻と、他に喜劇二本)、イキナリ消しのパツと写し式を用いた。で、小生、その亜流をくんで、葵館にもち来し、進んでこれをいかなる週にも実行するにいたつた^(一〇三)

日本映画史における一つの画期となつた「パツと写し式」が、実は原氏の考案によるものだつたことを夢声はここで告白しており、当時の日本映画界における原氏の影響力をうかがい知れる。

この夢声と原氏が出会うきっかけとなつたのは、浅草・吾妻座で原氏の行つた説明に対し、弁士見習いの立場にあつた夢声が客席から野次を入れた出来事だつた。その時に夢声は原氏からの「一言のもとに、ペシャンコにされた」が、それ以後は原氏から引き立てられるようになつたといふ^(一〇四)。

夢声は原氏と同時期に活動した弁士の一人であり、日本映画史において最も著名な弁士とも言える。その夢声の回顧録などに登場する原氏の様子は、藤浪無鳴としての原氏の姿が同世代の弁士によつて伝えられた貴重な記録であり、その内容も他の弁士と比較にならない程に豊富である。例えば夢声は、原氏の人となりについて次のように回想している。

藤浪無鳴という斯界の大先生がいたが、これがまた大変な熱心家だつた。さよう、「クオレ」という映画の時のこと。少年斥候がトネリコの木に登る場面があつたが、先生このところがどうも感じが出ない。大体トネリコの木なんてあんまりみたこともない代物だ。そこで一日植物園に出掛けた。幸いトネリコの木なるものがあつた。「ハハア、これだな」しばし感に入つていた先生、植物園の事務員と談合の末?やにわに樹に昇つて、少年斥候宜しく小手をかざして、敵状偵察を身に以て体験し始めた。その後安心して「クオレ」に熱弁を振つたというのだから、ゲに経験とは恐ろしいものである^(一〇五)。

夢声はここで、原氏の弁士としての探究心や熱心さを語つている。それはすなわち、夢声が原氏と近しい間柄に

あつた弁士だったことを示している。そればかりでなく、略年譜⁽²⁾の昭和三年に公開された『ベン・ハー』の新聞広告では、弁士を務めた原氏について、「藤浪無鳴さんは徳川^(マム)無聲さん達の先生格にあたる人」と紹介されているように、夢声にとどまらず多くの弁士たちの先生格に当たる人物であると世間からも認識されていた。

また、大日本映画協会を原氏と共に立ち上げた小林勇吉^(一〇六)（一八九九～一九五四）は、前述の夢声の回想と同じ出来事と思われる逸話を取り挙げながら、原氏の性分について次のように述べている。

藤浪の勉強振りを語る押話では、伊太利物で「クオレ」の中「母を尋ねて三千里」の篇であつたと思ふが、少年が榆の木に登つて母の姿を眺めるといふ場面がある。その爲に小石川の植物園に出かけ番人にことわつて榆の木に登つた事があつた。一寸正氣の沙汰ではないが、これが藝熱心の名人氣質とでも云ふのであらう。^(一〇七)これは、原氏の研究熱心な姿が周囲の人たちに深い印象を与えていたことを物語つていよう。その徹底ぶりは、弁士としての在り方にもよく表れていた。例えば、原氏は映画説明のために自宅に大英百科全書を揃えていただけではなく、その他の百科全書を毎年新版に買い換えていた。^(一〇八)また風景写真の説明をする際には、その場所の地理的調査をしてからでないとステージに上がらなかつたという。そのうえステージでは英語の字幕を読めただけではなく、英語を交えて説明を行うことができ、さらにはその字幕を一度音読したあとに一々を翻訳したとも伝えられている^(一〇九)。こうした原氏の情熱は、前述した『クオバチス』鑑賞後での一念発起が出発点となつていると考えられる。

他方で原氏は、映画の極めて詳しい説明書を制作して観客に無料で配布したり、脚本の解説や登場した地方の地理や歴史についても講義を行うなど、ファンに対して非常に親切であつたとされる。その配布された詳しい説明書に当たると考えられるものとして、大正一三年三月一四日に武藏野館で配布された「活動写真（シネマグラ

フト）「術とはなんぞ」という論文も知られている。⁽¹⁻¹⁰⁾ その反面、上映中のマナー違反には大変厳しく、客同士の雑談や飲食による音に対しても容赦なくステージから叱っていたようである。⁽¹⁻¹¹⁾

原氏の弁士としての評判については、映画説明の声量では負けたことがないとも伝えられている。⁽¹⁻¹²⁾ またこの当時、弁士の説明スタイルには、煽情的な文句を使用する「うたい派」と煽情的な調子を探ることを一切避けた「解説派」という二系統があつたが、原氏の場合は徹底した「解説派」であったようだ。⁽¹⁻¹³⁾ それも、弁士の間では「弁士声」として広く用いられ流行した浪曲の口調である「浪花節」ではなく、珍しい「自然の声」と称された、節を一切用いない説明を原氏は行つた。⁽¹⁻¹⁴⁾

さらに原氏が尊敬した映画俳優として、当時日本でも広く知られたアメリカ人俳優のウイリアム・S・ハート（一八六四～一九四六）の名前が挙げられる。原氏のハートに対する私淑は深く、その生涯をこと細かく研究した
⁽¹⁻¹⁵⁾ らしく、ハート出演映画の原氏の映画説明は異色を放つていたとされる。

こうした原氏の説明に、多くのファンは魅了されていたようである。後述する発声映画（トーキー映画）登場の際には、「米國に盲人に觀せる活動寫眞が制作されたと頃日の新聞紙は報ず、此⁽¹⁻¹⁶⁾かも不思議にあらず我が國には夙に盲人にも判る活動寫眞あり但し説明は藤浪無鳴に限ること」と、映画雑誌でも称賛されるほど、その実力が高く評価されていた。

ところで上掲の先行文献や先行研究、また郷土史資料においては、夢声をはじめ、大辻司郎・生駒雷遊両氏が原氏の門下や弟子であつたと述べられている。⁽¹⁻¹⁷⁾ だが、筆者が入手した映画関係資料を調査してみると、大辻司郎の師匠として名が挙がっていたのは、松嶋眺陽（生没年不詳）・柳思外（生没年不詳）・染井三郎（一八七七～一九六〇）だった。また生駒雷遊の師匠として名が挙がっていたのは、東郷雷州（一八六五～没年不明）・塙田喜遊（生

（没年不詳）の両氏であり、夢声の師匠は清水靈山（一八七六～一九二二八）となつてゐる。また大辻司郎は原氏と親しい関係であつたとされるが、生駒雷遊と原氏との接点は現在も不明のままである。⁽¹⁻¹⁸⁾ では原氏の門下生とされたいた夢声は、原氏をどのように呼んでいたのであろうか。筆者が現在確認できたのは、「藤浪無鳴」という斯界の大先生⁽¹⁻¹⁹⁾「斯道の大先輩藤浪無鳴氏」⁽¹⁻²⁰⁾「大正のはじめごろ、私ども活弁仲間の大先輩に藤浪無鳴という人がおられまして」⁽¹⁻²¹⁾ という表現である。これらから推測できるのは、夢声をはじめとした多くの弁士たちと原氏との間には、実際の師弟関係は結ばれていないものの、原氏を先生や師として慕う者が多く存在しており、また世間もそのよう認識していたということである。

このように原氏は、明治四二年の二三歳頃に原藤月という名で弁士としてデビューした後、藤浪無鳴と改名した頃には日活の弁士となり、日活の前身の一つに当たるM・パテー商会における水書未狂の門下生⁽¹⁻²²⁾の出世頭として大いに活躍し、大正一年の三五歳頃に東洋キネマが開館した際には「斯界の最高權威」⁽¹⁻²³⁾と紹介されるほど、大きな成功を収めた。また原氏は自身で何でも出来たために、映画上映中に行う伴奏の不要論者であつた。このために関東大震災後の武藏野館において樂士長の毛谷平吉と喧嘩となり、原氏と樂士長は喧嘩両成敗で退館処分となつたとのエピソードも伝わっている。⁽¹⁻²⁴⁾

しかしながら、弁士として人気を博し順調に活躍した原氏の姿は、映画界における活動の一側面であつた。次章では、映画界の事業者という別の一面について、原氏の活動を見ていきたい。

五、映画事業者としての活動とムツソリーニとの交流

弁士藤浪無鳴の名が高まる中で、原氏は突如として大日本映画協会（以下、映画協会と表記）という団体を創設し、海外映画の輸入を始めるようになる。原氏が映画協会の主宰を務めていたことは、先行文献や先行研究では、石田日信師（一九三三～一〇一二。以下、日信師と表記）の六「群像」で少し触れられているだけであり、詳細は不明だった。

さて、この映画協会が設置されたのは、原氏が三五歳の大正一一年三月一日のことである。⁽¹²⁵⁾ そして、翌四月に横浜市南太田町一四五七番地で小林勇吉と同会を創設した。創設時には、原氏が主管、小林勇吉が主事に就任している。そしてその事業内容とは、映画の輸入と輸入映画の貸し付けであつた。⁽¹²⁶⁾ また映画協会は、昭和二年に「映畫報國・事業奉仕」という会の標語とともに、「伊太利映畫界への紹介 優秀映畫の輸入並配給」という事業内容を掲げた。⁽¹²⁷⁾ そしてその後の昭和三年七月一六日には東京日本橋ビルに事務所を設置しており、昭和一〇年には原氏の息子である法雄が加わった。⁽¹²⁸⁾

この映画協会の事業は、大正一年四月、原氏が大正活映から借金して『散り行く花』を個人購入した後、大正活映と共同興業⁽¹³⁰⁾として当映画の上映を開始したことに始まる。⁽¹³¹⁾ こうして海外映画の輸入と輸入映画の貸し付けを行うようになった原氏は、次々と以下の略年譜③に挙げるような事業を手がけるようになった。

【略年譜③ 原真平と映画協会の事業】

大正五年（一九一六）（二九歳頃）原氏が個人で文部省社会教育局より『クオレ』（全五巻）の活動写真ファイルム認定を得る。内容は『勇敢ナル少年』（一巻）、『母ヲ尋不テ三千里』（三巻）、『難破

船^(一卷)

大正一一年（一九二二）三月一日〔三五歳頃〕、映画協会を設置。

四月、横浜市南太田町一四五七番地に映画協会を創設。主幹原氏、主事小林勇吉就任。

四月『散り行く花』の買い付け、大正活映と共同興業。

大正一五年（一九二六）一月二日〔三九歳頃〕、『キネマ旬報』に『アルチゴゴロ』の映画広告を掲載。

五月一日、『キネマ旬報』に『アルツイゴーゴロ』を『虹を踏む者』と改名して映画広告が掲載。

六月、イタリアより『偉哉リツツオ艇長』^(一三八)を輸入。

昭和二年（一九二七）三月〔四〇歳頃〕よりムツソリーニの要望に応え、下位春吉と共に日本の現状を伝える映画として、『山水渓谷の美と水力電氣開發の實況』、『日本の蠶絲』、『日本の茶と富士川』の三本を制作し、六月イタリアへと輸出。

下位春吉が監修し、大橋玄鳥と共に編集した『ムツソリーニ』（全一二巻）が一月五日より神戸朝日館、一一月一八日より武藏野館・帝国劇場で上映。

昭和三年（一九二八）〔四一歳頃〕ムツソリーニが総裁を務めるルーチエ映画会社と契約し、同社作品の三年間の独占配給権を得る。

イタリアビッタルガ社と契約。

七月一六日、東京日本橋ビルに事務所を設置。

一月頃、『ヴェニスの謝肉祭』（全一二巻）、『フラ・デアポロ』（全一二巻）、『ヴェニ

スのパン屋』他三本をイタリアより輸入。⁽¹⁴⁴⁾

ルーチエ映画会社提供作品の『小麥の戰争』、『クオーレ』、『ロマーニヤの血』の販売を開始。⁽¹⁴⁵⁾

昭和四年（一九二九）（四二歳頃）泰西映画社と提携し、『巖窟王』を輸入。⁽¹⁴⁶⁾四月二十四日、輸入した『モンテ・クリスト』が太秦映画社の配給に内定。⁽¹⁴⁷⁾

アントニオモスコ商会の日本總代理店として昭和四～五年に歐州映画一六作品の輸入を発表。⁽¹⁴⁸⁾

昭和一一年（一九三六）（四九歳頃）原氏は渋谷区幡ヶ谷本町一ノ七〇に住居を構え、東京市渋谷区幡ヶ谷一ノ九を映画協会の住所とする。⁽¹⁴⁹⁾

またこの他には、輸入時期は不明ながら、『生ける屍』、『バラライカ』、『ジャンヌダルク』、『魔法の時計』、『ロシヤ』の輸入も行っている。⁽¹⁵⁰⁾

さらに原氏は映画協会を主宰する以外に、昭和七年（一九三二）の四五歳頃には、公益奉仕機関として大日本映画奉公協会を創立⁽¹⁵¹⁾した。また創設時期や詳細は不明ながらも、メルカトル商会・大日本映画教育会・映画同志会・映画慰安会・映画助成会・映画共済会という団体も創設している。のみならず、昭和三年二月には応用活動写真講座の講師として京阪神地区の小中学校教員に映画説明法の講演を行つており、また昭和六年（一九三二）五月七日には全日本映画業組合の評議員に就任したほか、同年七月九日には映画関係者として文部省社会教育局との懇親会に出席するなど、多方面における活動を行つている。⁽¹⁵²⁾

ところで、原氏の映画事業に関する活動の中で特に注目すべきことは、ムツソリーニとの関わりである。上述

の先行文献や先行研究でも若干触れられていたように、原氏は渡欧の際にムツソリーニと出会い、非常に懇意になつたという。それでは、二人の出会いはいつ頃になるのであろうか。

筆者の調査によれば、原氏とムツソリーニとの出会いは、三八歳頃の大正一四年にヨーロッパへ渡航したことがきつかけとなつた。当時は弁士による外国への映画行脚が流行していたようで、原氏は四月頃にイタリアへ渡るダンテ学者の下位春吉（一八八三～一九五四。以下、下位と表記）の渡航に同行している〔※筆者注、下位に関する次章で述べたい〕。

当初二人はシベリアを経由してイタリアへ向かう予定であったが、下位が有名な国粹主義者であったことが障害となつたことで断念し、航路でイタリアを目指すことになつた。同年六月には、スエズ運河を抜けてフランスのマルセイユに到着し、汽車に乗り換えて六月八日にローマへ到着した。そしてこの二ヶ月に及ぶ船上生活で、

原氏は下位からイタリア語の授業を受けることになつた。このことは、原氏と下位が非常に親密になつた様子をうかがわせる。

このイタリア滞在中に原氏は、ヨーロッパやイタリアの社会情勢や文化、映画業界の現状や撮影技法などを学び、ムツソリーニとの会談を果たすことになつた。なお原氏の渡欧期間は四月からの五ヶ月間であったが、ムツソリーニと会談した日時については、詳細は不明のままである。⁽⁵³⁾一方、下位が記した



【写真②】大正14年（1925）6月にローマで撮影された原氏（38歳頃）の写真。
（『読売新聞』1928年9月22日朝刊第5面）

旅の記録によれば、二人はグラッパ地方を訪れている。原氏はそこでグラッパの美しい情景と、戦死者を供養する僧の姿の対比に感激を覚え、「まるで詩だ、^{し（一五四）}無言の詩だ」^{（一五五）}という言葉を残したと伝えられている。また『写真

② は六月にローマで撮影されたものである。^{（一五六）}

原氏がヨーロッパに渡ったのは、自身が好む外国映画を学びたいという弁士としての向上心に加え、創設したばかりの映画協会における輸入事業が大きく関わっていたのではないかと推測する。なぜなら原氏の帰国後から、映画協会がイタリアをはじめとする世界各国の映画を輸入し始めているからである。故に原氏は、外国映画の輸入に関する取引先選定や、その輸入に必要な知識を学ぶためにも渡欧したのではないだろうか。

こうして大正一四年の渡欧以降、映画協会は多くの外国映画を輸入する一方で、前章で示したように原氏は弁士活動も平行しておこなっていた。^{（一五七）}特に昭和二年（一九二七）の四〇歳頃からは、ムツソリーニに関する作品を扱うようになつた。同年三月には、ムツソリーニの要望に応え、下位と共に日本の現状を伝える映画『山水渓谷の美と水力電氣開發の實況』、『日本の蠶絲』、『日本の茶と富士川』を制作し、六月にイタリアへと輸出している。^{（一五八）}また同年一一月には、原氏が大橋玄鳥と共に編集して下位が監修した『ムツソリーニ』（全一一巻）が発表され^{（一五九）}いる。そして翌三年七月頃に映画協会は、ムツソリーニが総裁を務めるルーチエ映画会社と独占契約を結ぶことに成功し、同社作品の三年間にわたる配給権利を得て^{（一六〇）}いる。その一方で、同年七月二三日に『ムツソリーニとライオン』の説明をよみうり東京ラジオで行つて^{（一六一）}いる。これらの事情からは、原氏はムツソリーニと非常に近しい関係となつた様子がうかがえる。こうしてイタリアを中心に各国より輸入した映画作品が日本国内で評価を得るようになった原氏は、映画輸入業者としての地位も築くことになった。

ところで、上掲の先行文献や先行研究には、ヨーロッパに二度渡ったことが記されていたが、原氏の二度目の

渡欧はいつ頃であろうか。当時の『読売新聞』の報道によれば、行程や滞在期間などは不明であるものの、ムツソリーニとの関係が深くなつた昭和三年（一九二八）の三月頃より、同年七月頃にかけての四一歳頃の期間であることが判明した。⁽¹⁶²⁾

ただ、この頃のイタリア映画界は、一度目の渡欧をおこなつた大正一四年頃とは大きくその状況が変わつていった。それは大正三年（一九一四）に第一次世界大戦が起きて以来、多くの映画監督や俳優がイタリアを見捨ててヨーロッパ各国に流出していたことが影響していた。⁽¹⁶³⁾前述のように、映画協会はムツソリーニが総裁を務めるルーチエ映画会社と契約を結び、アントニオモスコ商会の日本総代理店として欧州映画一六作品の輸入を発表するなど成果を上げたようであるが、大正一四年頃には、その輸入量も大戦の影響を受けて縮小していたようである。だがこの二度目の渡欧の昭和三年頃になると、第一次世界大戦の影響で滞つっていた欧州映画の輸入量も回復した。こうして日本の外国映画ファンを大いに喜ばせることとなつた原氏は、その活躍ぶりが映画雑誌や新聞で次のように大きく紹介された。⁽¹⁶⁴⁾

説明する藤浪無鳴さんは徳川無聲さん達の先生格にあたる人で、さき頃イタリーまで行つて有名なムツソリーニとお友達になつて來たと云ふえらい説明士です。からだも丸くて大きくて見えるから勇ましさうです。⁽¹⁶⁵⁾

この記事からは、当時の原氏は映画界だけなく、日本国内でも注目された人物であったことが分かる。ところで映画界ではこの当時、大きな出来事が起つた。それは原氏が二度目の渡欧を行なつた前年（昭和二年）、アメリカ映画界で映画映像に音声や音楽を吹き込んだレコードを同期する発声映画が登場したことである。その发声映画の技術は、翌三年には日本へと輸入され、有名弁士による音声の吹き込み作業が開始された。そして昭和四年以降には、弁士が説明を行う無声映画ではなく、发声映画の上映を各映画館がこぞつて開始し、昭和

一二年（一九三七）頃には多くの映画会社が发声映画の上映に移行した。こうした技術革新による雇用形態の変化に対し、弁士はストライキを起こすなどして対抗したが、無名弁士や若手弁士の多くは淘汰され、伴奏担当の樂士などを含む多くの無声映画関係者が失業した。^(一六六)

このような映画界の大きな変化も関係したのか、原氏は弁士としての活動よりも、映画協会での外国映画輸入に力を注ぐようになる。そして、映画協会での輸入実績や发声映画へと変化していく日本映画界の実情とともに、原氏も弁士を引退し、専ら外国映画の輸入業に専念するようになつたと世間は認識したようである。それを物語るようには、昭和五年五月の映画雑誌では「往年新宿武蔵野館で満都の映画ファンをうならせた藤浪無鳴こと原真平氏、この頃ではすっかり歐州映畫輸入業者になつてしまつて」と紹介されており、同様に昭和七年五月には「説明界の權威、目下歐洲名作物の輸入、新規事業び計畫等」と述べられている。このように世間的には、原氏は四三～四五歳頃には弁士を引退して外国映画の輸入販売業に転じたと受け取られるようになつていった。

なお原氏が弁士を引退した正確な時期は、不明とせざるを得ない。昭和三年（一九二八）二月一七日の『読売新聞』（一〇面）には、「説明界を引退した藤浪無鳴」と伝えているが、同年七月二三日の『読売新聞』（三面）で

は、略年譜⁽²⁾に示したように『ムツソリーニとライオン』や『ベン・ハー』の説明をよみうり東京ラジオで務めていることが報道されているため、この点は判然としない。一方で原氏は大正一年の三五歳頃より、弁士としての活動よりも映画協会主宰として映画輸入などの活動に力を注ぎ、それを本格的に開始したことは先に述べた通りである。これと関わつてくるのが、日俊師による^(五)「追憶」において、大正二年には息子が、また九年には妹が相繼いで亡くなつたことがきっかけとなつて弁士活動を引退したと記してあることである。だが本稿で確認したように、昭和三年においても原氏は弁士活動を行つてゐるため、この点はさらなる検討の余地があると考え

る。

また上述のように、先行研究では息子と妹との死別がきつかけとなつて原氏は宗教や仏教に関心を抱くようになり、特に日蓮宗に凝つっていたことから「お上人」という綽名が付けられていたとされている。現時点ではこの綽名がいつ頃から付けられるようになったのかは不明である。だが仮に二人との死別より以前から綽名が付けられていたとするならば、原氏の宗教思想の変化についても、先行文献や先行研究における記述と大きな矛盾が生じることになる。なお、原氏の宗教觀に関する映画関係資料としては、略年譜②に記した昭和五年（一九三〇）八月二五日の「小笠原明峰渡米送別会」において小笠原長生と共におこなつた「日蓮上人に関する講演」が挙げられる。また昭和二七年（一九五二）一月一八日に田中智学（一八六一～一九三九）の第二七回忌を記念して開催された講演会で、夢声は原氏について田中智学の非常に熱心な信者であつたこと、時期は不明ながら様々な逸話を原氏より聞かされたことなどを回想している。⁽¹⁶⁹⁾ このほか昭和一六年（一九四二）発行の『昭和十六年度版日本映畫年鑑』⁽¹⁷⁰⁾ で、「日蓮の唱導に依る皇道日本主義」という題名とともに、原氏を紹介している。『昭和十六年度版 日本映畫年鑑』にこのような紹介があつた理由は不明であるが、前章で述べた昭和一五年に開設の総力戦研究所で、五三歳頃の原氏が高級軍人や參謀本部関係者に日蓮聖人の教えを説いていたことと関連するのではないかと思われる。ただし詳細は、今後の課題としなければならない。

以上のように、原氏の映画界での活動についてはまだ不明な部分も多く残るが、前章で確認した先行文献や先行研究と映画関係資料を対照した結果、息子や妹と死別した後も昭和三年までは弁士として活動していたことが確認できた。また大正一五年以降になるとイタリアやムッソリーニに關係する映画の輸出入をおこなつていたことも判明した。弁士としての活動時期がいつ頃までだったのかは不明であるが、昭和一年の四九歳頃には映画

協会主宰の立場にあつたことから、少なくともこの時期までは映画界において活動していたと考えられる。

なお、原氏が教義綱要事件と関わり昭和二〇年（一九四五）六月一一日に五八歳で死⁽¹⁷¹⁾去したことは、第二次世界大戦の混乱もあってか、当時の映画関係者にはあまり知られていないようである。それは映画関係の資料に原氏の晩年を記したものが確認できないことや、同時期に活躍した弁士の山野一郎（一八九九—一九五八）が「仏教に造詣の深い無鳴は、現在は僧職にあつて、日蓮宗某寺の住持、平和に余生を送っているとか」と昭和三年五年（一九六〇）発行の著書で述べているように、原氏の消息について映画界で知る者は僅少であつたと見られる。⁽¹⁷³⁾

六、昭和神聖会との関係について

昭和一〇年（一九三五）の四八歳頃に原氏が関わった団体として、日信師は〔群像〕で「昭和神聖会映画部玉川研究所」（以下、映画部と表記）を挙げている。⁽¹⁷⁴⁾「昭和神聖会」（以下、神聖会と表記）とは、昭和九年（一九三四）七月に、神道系の新宗教である大本の出口王仁三郎（一八七一—一九四八。以下、王仁三郎と表記）が教団内外を問わず「憂国の士と純真な愛国団体を作りたい」という思いから創設した団体とされる。⁽¹⁷⁵⁾日信師はこれに関して、原氏は「昭和神聖会映画部玉川研究所」という組織の創設に参画して活動されたが、後に他の幹部と考えの相違が明確となり、会から離れ会も解散したようです」と述べている。⁽¹⁷⁶⁾ただしその詳しい経緯は、これ以上明らかにされていない。筆者はこの問題に關係する資料として、大本の発行した『大本七十年史 下巻』⁽¹⁷⁷⁾や『眞如の光』⁽¹⁷⁸⁾、また公安調査庁の発行した『戦前における右翼団体の状況 下巻（その一）』⁽¹⁷⁹⁾を見出した。よつてここで

はこれらの資料に残されている原氏の活動について、検討していきたい。

まず公安調査庁発行の資料によれば、大本は昭和一〇年三月頃から映画機材を用いた布教活動を計画していた。これを聞きつけた在京信者の原氏がその趣旨に賛同し、所有する東京市世田谷区玉川町にある元舞踊研究所の建物を神聖会に無償提供したという。五月中旬以降に改修作業がおこなわれた舞踊研究所は、六月一日には昭和神聖会映画部玉川研究所として鎮座祭と開所式が執り行われたようである。原氏はこの映画部において、映画部長・制作局長・貿易局長・研究局長・制作演出課長・制作宣伝課長と多岐にわたる役職に就任したとされている。⁽¹⁸⁰⁾ 映画部では『皇軍と少女』という映画の制作や、輸入映画二作品の改作を始めたと伝えられている。⁽¹⁸¹⁾

一方、大本側の機関紙には、映画部設立が関わっているのか、同年四月四日に「みろく殿」で原氏が講演並びに座談会をおこなったと伝えられている。⁽¹⁸²⁾ 映画部は、昭和一〇年七月二六日頃に一七ミリ半のフィルムで作品を完成させ、二〇班を組織し、全国的に宣伝活動をする計画を立てていた。だが、同年八月に突如閉鎖されている。⁽¹⁸³⁾ しかしながら、翌九月には京都府亀岡天恩郷で映画神劇部という新たな映画撮影部が設置されている。ただし、この映画神劇部の名簿には、原氏の名前は載っていない。⁽¹⁸⁴⁾

こうした一連の動きの中で、日信師の述べる「後に他の幹部と考えの相違が明確となり、会から離れ会も解散したようです」との事情について筆者が調査した所、実際に映画部は同年七月頃に人事が刷新されており、原氏に代わって王仁三郎自身が監督指導を務めるようになっていた。⁽¹⁸⁵⁾ この経緯に関して王仁三郎は、当時トーキーと呼ばれて広く使用されていた映像と音声を一体化する手法（发声映画）を採用したもの、音声が全く出ないという不備が起こつたことについて触れている。それによると、その不備のために劇中の言霊への威力に影響が出るため、完成までは従通りの生言霊（^{イクコトタマ}）⁽¹⁸⁶⁾（^{イクコトタマ}）⁽¹⁸⁷⁾（^{イクコトタマ}）⁽¹⁸⁸⁾（^{イクコトタマ}）⁽¹⁸⁹⁾を用いて解説を入れるようにと伝えたという。こうして映画部

は、期日までに発声映画を完成させることに失敗した。また映写機も当初の一七ミリ半より一六ミリに縮写となり、映画部自体も王仁三郎自身が直接に監督指導を直接行うことになつたようである。この経緯からすれば、あくまで推測であるが、こうした王仁三郎の考え方が、映画界で実績を積んできた原氏と意見が食い違つたと考えられる。細かな点では異なる箇所もあるが、日信師はこれらの出来事を指して述べたものと思われる。

一方、この問題に関して公安調査庁側の資料は、映画部の関係者が全くの未経験者はかりであり、中心人物である原氏の撮影技術にも未熟な点があつたことから、フィルムは完成したもののが欠陥の多い作品になつたと伝えている⁽¹⁸⁸⁾。また映画部内では、制作中に原氏と他の幹部との間に対立が起つたと伝えられている。その原因となつたのは、原氏の技術に対する疑惑や制作における精神面に関する確執であつたとされる。結果としてそれは原氏に対する排斥運動へと繋がり、フィルム制作の失敗が明らかになつた後では、そもそも大本の映画進出は原氏の欺瞞的策謀に乗せられたのだとする意見が噴出した。その結果、結果映画部関係者は八月上旬に引責辞任し、映画部も解散となつた。最終的に大本は原氏との関係を全て絶つたと述べている。

このように原氏は、神聖会映画部部長として大本の布教活動映画の制作に関わつたが、部内で対立が起つり、制作失敗の責任を取らされる形で大本からその関係を断ち切られたと考えられる。一方、公安調査庁側の資料には、原氏は大本の在京信者と記しているが、これ以外に原氏が大本の信者であったと伝えるものは確認できない。もつとも、この問題については更なる資料の調査と考察をするものの、原氏は映画技術者として関わろうとしたのが実態に近かつたのではないかと思われる。

では、原氏は一体どのような経緯で大本と関係を持つようになつたのであろうか。原氏と大本との両方に関わりがあつた人物として挙げられるのが、前章でイタリア映画の輸入やムッソリーニとの関わりで述べた、下位春

吉である。福岡の井上家に生まれた下位は、結婚を機に下位家の養子となつた。⁽¹⁸⁹⁾ 中世イタリアの詩人ダンテ・アリギエーリ（一二六五～一三二一）の研究を専門とし、最初にイタリアへ渡航したのもその研究が目的だった。

大正三年に東京外国语学校伊語科専修過程を卒業した際に、イタリア語でおこなった謝辞を在日イタリア大使が評価したことで、下位はナポリにある王立東洋学院の日本語教師に推薦された。これを機にイタリアへ渡つた下

位は、日本語教師を勤めたほか、多くの日本文学作品をイタリア語へ翻訳した。また日本歌人の詩を纏めて詩集を刊行するなど、日本とイタリアの文化交流にも貢献した。だがその頃ヨーロッパでは第一次世界大戦が勃発し、下位は縁あつて戦地を訪れ、後にイタリア軍の義勇兵となつた。下位はこの戦地訪問の際、ファシストの先駆者と称されるガブリエーレ・ダンヌンツィオ（一八六三～一九三八）と出会い、その思想に大きな影響を受けた。ダンヌンツィオのファシスト思想に感化された下位は、その後に台頭してきたムッソリーニのファシズムに傾倒

するようになり、日本国内でもファシズムやムッソリーニの宣伝を盛んに行うようになった。

この下位と原氏が出会つたのは、原氏の一度目の渡欧の前年となる大正二年、原氏がイタリア映画『ボンベイ最後の日』⁽¹⁹⁰⁾の説明を帝国劇場で行つた際に、下位が評価したことだつた。⁽¹⁹¹⁾ 大正六年に出版された著書でも「私は活動寫眞を説明する人としては、學殖なり、話術なり、不斷の努力なり、藤浪無鳴君を日本一だと敬慕している」と述べているように、下位は原氏を高く評価していた。そして二人は



【写真③】撮影時期・年齢等不詳。推定篤志の生涯を護法愛宗の後半カ。（「一崇高な者一鳴呼！原真平先生の生涯」1995年10月号56頁）

先述のように、イタリア映画の輸入やムッソリーニ関係の事業で深く関係を持つようになった。下位が原氏に关心を抱いた理由を示す資料は、今のところ他には見つかっていない。ただ、ファシズムやムッソリーニの宣伝を日本国内で進めたいと考えていた下位にとって、原氏の映画輸入事業は利用価値があると写つたものと考えられる。

ところで下位は大本の信者ではなかつたものの、愛国者として王仁三郎の思想に呼応したことから、神聖会の創設当時より会に所属していたようである。また、下位を重宝した王仁三郎は、全国で開催した講演会に下位を同行させていた。⁽¹⁹²⁾ 下位の講演は、大本に関するものではなく、そのほとんどが過激な時局解説とファシズム礼賛であつたとされるが、各地の信者はその講演に強烈な刺激を受けたようである。

その下位は、前述した原氏の大本における昭和一〇年四月四日の講演並びに座談会に同席しており、来場者に原氏を紹介している。⁽¹⁹³⁾ そればかりでなく、下位は映画部相談役にも就任しており、大本における原氏の活動の周辺には常に下位の姿があつた。このため下位は、神聖会の結成当初から会に参加し王仁三郎に近い立場であったことから、映画部発足の話が挙がつた時に、原氏を王仁三郎に紹介したのではないだろうか。⁽¹⁹⁴⁾

日信師の言及にもあつた原氏と神聖会との関係については、資料の乏しさから不明な点が多く残される。だが、原氏が大本の映画部に関わるようになつたのは、映画界で著名な人物であつたことが大きな理由となつたことは、少なくとも言えるものと思われる。よつて大本の映画部における活動は、原氏にとつては信仰の問題というよりも、映画界における活動の問題の一つとして位置づけられるのではないだろうか。即ちそれは、結果としては失敗に終わつたものの、弁士や映画事業に飽き足らず、撮影という実技の分野にも原氏は映画人として挑戦したと見るべきものと思われる。筆者はそこに、原氏の映画に対する情熱と、新たな分野への挑戦意欲を見出せるので

はないか、と考えるのである。

七、おわりに

以上、原氏や原家に関する従来の基本的文献や先行研究を整理・確認した上で、新たに発掘した郷土史資料や映画関係資料を用いながら、原氏の家庭環境や少年時代、また映画界での活動に関して検討してきた。これらをまとめると以下のようになる。

まず、従来の基本的文献と先行研究だけでなく、別の資料も合わせて検証したところ、原氏の母親は兼子という名前であり、出身地は長野県下伊那郡飯田町であることが確認できた。一方、先行研究の記述内容と郷土史資料とを比較したところ、原氏が携わったとされている乳牛の移送に関する内容などにはまだ検討すべき余地があることも分かり、基本的文献や先行研究には改めて検証すべき課題が残されていることも見つかった。

また映画関係の新資料により、原氏は明治四二年（一九〇九）の二三歳頃に原藤月という名で無声映画の弁士を始め、藤浪無鳴に改名後は梅屋庄吉とも関わりながら華々しく活躍し、「斯界の最高権威」とまで称されるほどになった人物であったことが分かった。さらに原氏は弁士だけでなく、三五歳頃から映画協会の主宰者としてイタリアを中心としたヨーロッパ各国やアメリカフィルムの輸入にも携わる映画事業者としても成功し、ムツソリーニとも近しい関係ともなったことも判明した。

なお先行研究には、大正二年（一九一三）に息子と、大正九年（一九二〇）に妹と死別したことがきっかけとなつて弁士を引退し宗教研究をはじめたと述べられていたが、二人が没した後の昭和三年（一九二八）の四一歳

頃にも弁士として活動を継続していた事実を得られた。弁士を引退した時期は未だ不明であるものの、昭和一年（一九三六）の四九歳頃までは少なくとも映画協会の主宰者として映画界で活動していたと見られる。

これらに加えて、愛国者として大本の昭和神聖会に所属していた下位春吉と近しくなった関係から、神聖会の映画部に撮影者として原氏は昭和一〇年（一九三五）の四八歳頃に関わるようになつたものの、内部対立の中で責任を取らされる形でその関係を絶たれたと見られることも新たに得られた。そしてそれは、結果として失敗に終わつたものの、撮影という映画技術者として原氏が関わろうとしたものだつたと考えられる。

このように新資料により、原氏には弁士や映画事業者として映画界で活躍した姿だけでなく、撮影者としても挑戦しようとしたという、映画人として三つの側面があつたことが明らかとなつた。藤浪無鳴という芸名だけではなく、当時の映画界でこれほど多方面で活躍した人物であつたということは、これまで十分には知られてこなかつた。故に、教義綱要事件の精神的支援者であつたとする従来の評価に加えて、映画人としての原真平という評価も、今後は考慮されていくべきだと思われる。

なお先行研究で述べられていた富士派や日蓮主義、国柱会との関係については、現在においても不明な点が多く残されており、今後の課題である。ただ、原氏を熱心な田中智学の信者であつたとする夢声の証言や、昭和五年（一九三〇）の四三歳頃には小笠原長生と共に「日蓮上人に関する講演」をおこなつてゐること、昭和一六年（一九四二）発行の『日本映画年鑑』には「日蓮の唱導に依る皇道日本主義」という題名が紹介されていてことなども確認できた。また、藤浪無鳴の綽名が「お上人」であつたことは、原氏の宗教思想の変化を考察する上で重要な手がかりとなるのではないかとも考えられる。そしてこの事は、教義綱要事件の関係者に日蓮聖人に関する知識を受けたことや、その知識の内容などとも深く関わつてくるのではないかとも思われるため、今後は原氏

の思想に関する問題についても調査を進めていきたい。

本稿で述べたような、法華宗と出会いう前の原氏に関しては、これまで詳しい事情がほとんど明らかではなかった。だが、従来知られていなかつた資料の発掘により、原氏の新たな一面も浮かび上がってきた。ここに、原氏に関する研究の可能性の一端を見出すことができるのではないだろうか。その可能性を求めて、今後も更なる資料の発掘と共にその事跡の解明と思想面の究明を目指していきたい。

註

(1) 大平宏龍先生は、昭和法難の範囲を株橋日涌先生（一九〇九～一九八四）の資料に基づきながら以下のように示している。一、教義綱要事件 二、曼荼羅國神抹消問題 三、各派合同問題 四、日蓮遺文削除問題。大平宏龍「昭和法難私見」『法華仏教研究』第一七号、二〇一三年一二月、四頁。大平宏龍「戦時体制の日蓮門下—曼荼羅國神不敬事件と天皇本尊論」『近現代の法華運動と在家教團シリーズズ日蓮 第4巻』春秋社、二〇一四年、二五八頁。

(2) 塩田富造氏（以下、塩田氏と表記）は、大正年間に綿の輸出入などで財を成した兵庫県の実業家である。また塩田氏は、社会活動での功績も非常に大きく、大学への研究費の寄附や、戦災で焼失した神戸の湊川神社の再建費も一人で賄っている。塩田氏は非常に熱心な皇室主義者であり、その信念を養う上で、原氏の研究は非常に重要なあつたという。一方、原氏は塩田氏より経済的に相当な援助を受けていた。その塩田氏からの紹介であつたという点が、原氏が藤田師を何の警戒もなく受け入れた理由の一つとされている。藤田晃道『宗門秘聞不敬事件外伝』第二版（以下、②『外伝』と表記）私家版、一九七一年、二二頁。「筆者注、『外伝』には初版と第二版の内容に若干の差異があり、本稿での引用などの際には第二版を使用する」。森田康之助『湊川神社史・下巻（鎮座篇）』湊川神社社務所、一九八七年、七三六～七三八、七四二頁。

映画界の原真平（松井孝翔）

(3) 藤田師に塙田氏を紹介した人物は、兵庫県特高課の富岡哲郎氏であり、二人は教義綱要事件の渦中において親密な関係となつてゐた。前掲(一)『外伝』一二頁。兵庫県警察監査課さん委員会編『兵庫県警察史 昭和編』兵庫県警察本部、一九七五年、三二四頁。藤田晃道「宗門史談氣づくままで」『宗門史談』第三号、一九七六年九月、七〇七一頁。

(4) 前掲(一)『外伝』七〇頁。

(5) 小笠原日堂『曼陀羅國神不敬事件の眞相』(以下、(一)『眞相』と表記)無上道出版部、一九四九年、一五一頁。

(6) 松井日宏「曼荼羅國神不敬事件で苦闘する本宗への則遣変化の人 原真平先生を追悼する—第三十七回忌を迎えて—」(以下、(二)「追悼」と表記)『無上道』一九八一年六月号、一九八一年。

(7) 法華宗昭和法難五〇周年顕彰会編『護り貰いた信心の燈』(以下、(四)『信心の燈』と表記)法華宗宗務院、一九九一年。

(8) 松井日俊「—崇高な護法愛宗の篤信者—嗚呼！原真平先生の生涯を追憶」(以下、(五)「追憶」九月号と表記)『無上道』一九九五年九月号、一九九五年。松井日俊「—崇高な護法愛宗の篤信者—嗚呼！原真平先生の生涯を追憶」(以下、(五)「追憶」一〇月号と表記)『無上道』一九九五年一〇月号、一九九五年。

(9) 石田日信「昭和法難・曼荼羅國神不敬事件」彼我の群像(以下、(六)「群像」と表記)『桂林學叢』第二四号、二〇一三年三月。

(10) 恤造の甥にあたる柳瀬幸三氏が恤造を「恤さま（じゅつさま）」と呼んでいることから、本稿では恤造の読みは「じゅつぞう」とする。山本脩平「下伊那飯田に於ける明治・大正乳業の歴史 五」(以下、「乳業の歴史 五」と表記)『伊那』一九八一年四月号、一九八一年。四一〇四二頁。

(11) 前掲(五)「追憶」九月号一〇頁。

(12) 前掲(一)『眞相』一一二～一一三頁。

(13) 前掲^(五)「追憶」九月号一一頁。

(14) 前掲^(三)「追悼」一〇頁。

(15) 前掲^(五)「追憶」九月号一〇頁。

(16) 墓石には、「姓、市瀬名兼子飯田士族市瀬四郎 長女年十八嫁男生眞平女 烈産烈直没矣享年二十有三 瞽生前僕勤能理、貞操自守而不可復見憾曷已茲建立石表其誠云原恤造自識」とある（日俊師個人資料）。

(17) 墓石には、表「原家代々墓」、右「無相院觀月日恤居士昭和二、八、二九 恤造七十四歳」、「淨心院妙得日貞大姉 大正九、十二、一七 恤造五女貞枝二十三歳」、「誠諦敬慎孩子大正二、七、一 眞平長男慎二歳」、裏「二世眞平建立」とある。前掲（日俊師個人資料）。

(18) 前掲^(三)「追悼」一〇頁。

(19) 前掲^(五)「追憶」九月号一〇頁。

(20) 『官報』第五九六一號附錄、明治三六年五月一九日、二頁。猪野三郎編『第三版 大衆人事錄』帝國秘密探偵社・

帝國人事通信社、一九三〇年、五〇頁。

(21) 夢声は本名を福原駿雄といい、明治二七年四月一三日、島根県に生まれる。弁士としては大正二年に清水靈山に弟子入りし、福原靈川と名乗る。後に各地の映画館を渡り歩き、大正四年に赤坂・葵館へ移籍し、徳川夢声と改名する。その後に夢声は弁士としてのキャリアを積み、弁士番付の横綱に輝くほど活躍し、弁士黄金期を築いた。弁士引退後は、漫談家や俳優としても活躍し、昭和四六年（一九七一）八月一日に七七歳で死去する。無声映画鑑賞会編『無声映画と珠玉の詰芸』アーバンコネクションズ、二〇〇一年、一四一頁。

(22) 前掲^(五)「追憶」九月号一、一二頁。ただし、いつ上京したかは記されていない。

(23) 前掲^(五)「追憶」九月号一〇、一三頁。

(24) 前掲^(五)「追憶」九月号一三頁。

(25) 前掲②『外伝』六六〇六七頁。森松俊夫『総力戦研究所』白帝社、一九八三年、四四〇四五頁。前掲④『信心の燈』一一六頁。前掲⑤「追憶」九月号二三頁。

(26) 前掲①『眞相』一一二〇一一三頁。

(27) 「カメラータ」とは共同寝室、寄宿舎、寮、同じ兵舎に寝泊まりする兵隊、同宿の寮生や戦友、同窓、ファシスト党員同士の呼び名を意味する。郡史郎・池田廉『ボケットプロダレシップ 伊和・和伊辞典』小学館、二〇〇一年、一〇五頁。

(28) 前掲④『信心の燈』一一六頁。前掲⑤「追憶」九月号一二二頁。

(29) 原氏が主宰を務めた大日本映画協会（以下、映画協会と表記）と、昭和一五年に設立された財團法人大日本映画協会は、別団体である。『大日本映畫事業聯合會事業誌』大日本映畫事業聯合會、一九四二年、一、二六頁。

(30) 前掲⑥「群像」六八頁。

(31) 前掲⑤「追憶」九月号一頁。

(32) 原家や原氏に関する記載のある郷土史資料としては以下が確認できた。村沢武夫『郷土のキリスト教』飯田郷土史刊行会、一九六一年。村沢武夫『飯田の芸能人二』『伊那』一九六六年七月号、一九六六年。村沢武夫『伊那の芸能』伊那史学会、一九六七年。山本脩平『下伊那飯田に於ける明治・大正乳業の歴史二』（以下、「乳業の歴史二」と表記）一九八〇年一月号、一九八〇年。前掲「乳業の歴史五」。山本脩平『下伊那飯田に於ける明治・大正乳業の歴史二〇』（以下、「乳業の歴史二〇」と表記）『伊那』一九八三年一月号、一九八三年。

(33) 前掲『伊那の芸能』一九一〇一九二頁。前掲「乳業の歴史二」一七〇一八頁。前掲「乳業の歴史五」四一〇四二頁。前掲「乳業の歴史二〇」四七頁。

(34) 前掲「乳業の歴史二」一七〇一八頁。前掲「乳業の歴史五」四一〇四二頁。前掲「乳業の歴史二〇」四七頁。

(35) 前掲『伊那の芸能』一九一〇一九二頁。

(36) 依田陽治『竜峠のホルスタイン伊那の酪農追想の記』依田陽治、一九九二年、一九三頁。

(37) 前掲「飯田の芸能人二」二五頁。

(38) 前掲『第三版大衆人事録』五〇頁。

(39) 前掲「乳業の歴史二〇」五〇頁。

(40) 前掲『郷土のキリスト教』一五〇一六頁。

(41) 前掲（日俊師個人資料）

(42) 鳥宮九「映画人国記」「キネマ週報」第一〇〇号、一九三二年、二七頁。片岡一郎『活動写真弁史』共和国、二〇二〇年、一〇六頁。

(43) 前掲『伊那の芸能』一九一〇一九二頁。

(44) 前掲③「追悼」一〇頁。

(45) 前掲「映画人国記」二七頁。

(46) 川上七五三『長野縣勢總覽下巻』長野縣勢總覽刊行會、一九二八年、七九九頁。前掲「映画人国記」二七頁。

(47) 小林いさむ『映畫の倒影』伊藤書房、一九三三年、一五四〇一五六頁。読売新聞横浜支局編『神奈川の歴史下巻』有隣堂、一九六六年、一九〇〇一九四頁。

(48) 前掲『伊那の芸能』一九一〇一九二頁。前掲「乳業の歴史二」一七〇一八頁。

(49) 前掲『活動写真弁史』九〇、五五〇頁。

(50) 孫文は一八六六年、清朝末期の中国広東省香山県に生まれる。政治家、活動家として海外在住の華僑や諸外国からの支援を受け、革命運動をおこなっていた。一八九五年には香港で梅屋庄吉（以下、梅屋と表記）と出会い、様々な援助を受けることとなる。一九〇五年、日本において、中国同盟会を組織し、一九一一年に辛亥革命が起こると帰国し中華民国臨時政府の臨時大総統となるなど、中華民国の建国に貢献した。一九一九年に中国国民党

を結成するも、一九二五年三月一二日に五八歳で死去。小坂文乃『革命をプロデュースした日本人評伝 梅屋庄吉』講談社、二〇〇九年、五四〇八四、九〇〇一四三頁。東京国立博物館・毎日新聞編『特別展 孫文と梅屋庄吉—一〇〇年前の中国と日本』東京国立博物館・毎日新聞編『特別展 孫文と梅屋庄吉の生涯 長崎・上海で、孫文と庄吉の足跡を探す』長崎文献社、一二〇一二年、六二一六八頁。

(51) 梅屋は明治元年(一八六八)一一月二六日、長崎県の松田家に生まれ、幼少期に梅屋家の養子となる。一四歳の頃には、上海に渡るなどアジア諸国情勢を学び、二〇歳の頃には朝鮮へ米の輸出をおこなっている。後に香港へ出た梅屋は、写真館を成功させ財を成した。この頃に孫文と出会い意気投合した。梅屋は、孫文の革命運動の経済的支援を行うことになる。この援助の大きな資金源は、日本で始めた映画事業であり、設立したM・パテー活動写真会(M・パテー商会、エム・パテー)の収入は、梅屋と孫文にとって欠かせないものであった。昭和九年(一九三四)一一月二三日、六五歳で死去。前掲『革命をプロデュースした日本人評伝 梅屋庄吉』五四〇八四、九〇〇一三七頁。前掲『特別展 孫文と梅屋庄吉—一〇〇年前の中国と日本』七四頁。前掲『梅屋庄吉の生涯 長崎・上海で、孫文と庄吉の足跡を探す』六二一六八頁。

(52) 前掲『活動写真弁史』一〇四〇一〇七頁。

(53) 前掲『活動写真弁史』一〇六頁。

(54) 前掲『映畫の倒影』六五〇六六頁。

(55) 吉田智恵男『もう一つの映画史・活弁の時代』時事通信社、一九七八年、六五頁。

(56) 前掲『活動写真弁史』一〇六頁。

(57) 全關西映畫協會編『映画新研究十講と俳優名鑑』大阪朝日新聞社・東京朝日新聞社、一九二四年、一八九頁。

前掲『映畫の倒影』八四頁。前掲『活動写真弁史』二四四頁。

(58) 前掲『もう一つの映画史・活弁の時代』六四頁。前掲『活動写真弁史』一五四〇一六九頁。

(59) 前掲『梅屋庄吉の生涯・長崎・上海で、孫文と庄吉の足跡を探す』六六頁。

(60) 前掲『革命をプロデュースした日本人評伝梅屋庄吉』一五三～一五四頁。前掲『梅屋庄吉の生涯・長崎・上海で、孫文と庄吉の足跡を探す』六二～六五頁。

(61) 統合初期の名は「日活」ではなく、「大日本フィルム機械製造株式会社」である。前掲『活動写真弁史』一五二頁。

(62) 前掲『もう一つの映画史・活弁の時代』七四～七五頁。前掲『活動写真弁史』一五一～一五一頁。

(63) 前掲『梅屋庄吉の生涯・長崎・上海で、孫文と庄吉の足跡を探す』六八頁。前掲『活動写真弁史』一七〇頁。

(64) 前掲『映画人国記』二七頁。

(65) 大橋恒五郎編『昭和十六年度版 日本映畫年鑑』大同社、一九四一年、四五頁。

(66) 田中純一郎「横田商會と京都の撮影所」「映画技術」一九四三年四月号、一九四三年、六九頁。

(67) 前掲『映画人国記』二七頁。徳川夢声『徳川夢声集』駿河台書房、一九五四年、三〇三頁。前掲『伊那の芸能』一九一～一九二頁。前掲『もう一つの映画史・活弁の時代』一九七～一九八頁、二〇二頁。永井善久「『映画人』志賀直三の軌跡——『阿呆伝』などを手がかりに——」『明治大學教養論集』通巻四四一号、二〇〇九年一月、一五五頁。

(68) 前掲『もう一つの映画史・活弁の時代』九三～九五頁。前掲『活動弁士——無声映画と珠玉の話芸』一五五～一五八頁。前掲『活動写真弁史』一四四～一四五頁。

(69) 前掲『映画人国記』二七頁。

(70) 山野一郎『人情映画ばか』日本週報社、一九六〇年、一五七頁。

(71) 森岩雄「クオ・ヴァアヂス」『改造社文學月報』第三四号、一九三〇年、六頁。

(72) 前掲『映画の倒影』一五五～一五六頁。

(73) 前掲『活動写真弁史』二四四頁。

(74) 『活動之世界』一九二一年一〇月号、活動之世界社、一九二二年、二〇三頁。

(75) 碓水貞文編『教材映畫』一九三八年八月号、十六ミリ映畫教育普及會、一九三八年、二八〇二九頁。

(76) 小林養道『かえるの子は蛙』文献社、一九六六年、一五三〇一五四頁。

(77) 『活動之世界』一九一九年一月号、活動之世界社、一九一九年、一七二頁。

(78) 『東京朝日新聞』一九二三年一月二七日夕刊三面(『朝日新聞クロスサード』)。

(79) 徳川夢声『夢声自伝(上)』講談社、一九七八年、四〇五〇四〇六頁。前掲『もう一つの映画史・活弁の時代』

一九七一、一九八頁。前掲「『映画人』志賀直三の軌跡—『阿呆伝』などを手がかりに」一五五頁。

(80) 久松潛一・木俣修・成瀬正勝・川副國基・長谷川泉編『現代日本文學大年表 大正篇』明治書院、一九七〇年、三八一頁。

(81) 『キネマ旬報』一九二四年第一五二号、キネマ旬報社、一九二四年、一八頁。

(82) 『キネマ旬報』一九二五年第一九四号、キネマ旬報社、一九二五年、四一頁。

(83) 『キネマ旬報』一九二五年第一八九号、キネマ旬報社、一九二五年、四四頁。

(84) 『キネマ旬報』一九二五年第二〇六号、キネマ旬報社、一九二五年、一五頁。

(85) 今井紀『素人に作れる無線電話の實驗』主婦之友社、一九二六年、一三三〇一五頁。

(86) 前掲『日本映畫事業總覽 昭和二年版』一一六〇一二〇頁。

(87) 『キネマ旬報』一九二七年七月下旬号、キネマ旬報社、一九二七年、五二頁。

(88) 前掲『素人に作れる無線電話の實驗』二三〇一五頁。

(89) 荒木利一郎『映畫教育』一九三一年六月号、一九三一年、九頁。

(90) 『読売新聞』一九二八年七月二三日朝刊三面(『ヨミダス歴史館』)。

(91) 『読売新聞』一九二八年九月二日朝刊五面（「ヨミダス歴史館」）。

(92) 徳川無聲『うそけぼう譚』東寶書店、一九四八年、三八〇四一頁。

(93) 岸松雄「年月と映画批評・4」『映画評論』一九六五年一月号、一九六五年、九一頁。

(94) 大隈俊雄編『新興遊曲』一九三一年五月号、新興遊曲社、一九三三年、一五頁。

(95) 橋高廣『影繪の國』聚芳閣、一九三九年、五五〇五六頁。

(96) 東京新聞社文化部編『芸談』東和社、一九五一年、三三二六〇三三二七頁。

(97) 前掲『人情映画ばか』一五七頁。

(98) 前掲『映畫の倒影』四六頁。

(99) 早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史 第四卷』早稲田大学出版部、一九九二年、七一九頁。

(100) 山崎充彦「『ヴァシント』ムツソリーニは日本で如何にして描かれたか—表現文化における政治的「英雄」像」『国際センター研究年報』第一五号、一〇〇六年三月、二二二頁。

(101) 御園京平氏はこの出来事について、「伝説的には前説廢止は夢声ということになつていて」と指摘している。

御園京平『活辯時代』岩波書店、一九九〇年、八〇頁。

(102) 前掲『夢声自伝（上）三四九～三六一頁。

(103) 前掲『夢声自伝（上）』三六一頁。

(104) 前掲『徳川夢声集』三〇三頁。

(105) 前掲『芸談』三三六～三三七頁。

(106) 小林勇吉は、「いさむ」「勇」とも名乗っている時期がある。なお小林勇吉は映画協会創設から半年後、志願入隊のため会から離れている。その後に映画業界へ復帰するが、映画協会には戻らず、映画雑誌記者として活動し、原氏に関する詳しい記事を執筆した。北川冬彦編『映画往来』一九二九年新年號、映畫往來社、一九二九年、

一一七頁。前掲『映畫の倒影』四五〇七一、一一八〇一二三、一五四〇一六一頁。

(107) 前掲『映畫の倒影』四七頁。

(108) 田中純一郎「秘稿日本映画」第一五回『キネマ旬報』一九二七年一二月上旬号、一九二七年、五五頁。前掲『映畫の倒影』四八頁。

(109) なお原氏同様に英語を読める弁士として人気があつた人物に、内藤紫連（一八八一～一九二八）が挙げられる。大阪毎日新聞社編『毎年鑑』大阪毎日新聞社、一九二七年、五九四頁。前掲『映畫の倒影』七〇頁。秋山安三郎「お湯での飛ばつちり」「悲劇喜劇」一九七〇年二月号、一九七〇年、八頁。

(110) 笠原良三編『シナリオ』一九七一年五月号、一九七一年、六六頁。

(111) 松井翠声「今昔ファン氣質」「スクリーン」一九五一年二月号、一九五一年、六三頁。

(112) 前掲『映畫の倒影』一一八頁。

(113) 津村秀夫「映画美の味はひ方」大泉書店、一九五一年、二五八頁。

(114) 前掲『映畫の倒影』六八頁。

(115) 前掲『映畫の倒影』四八頁。

(116) 田中三郎編『映画往来』一九二五年三月号、キネマ旬報社、一九二五年、一四頁。

(117) 前掲五「追憶」九月号一一〇一二頁。前掲『伊那の芸能』一九一〇一九二一頁。前掲『乳業の歴史』二二一七〇一八頁。

(118) 前掲『活動写真弁史』四六四、四七一、四九一頁。

(119) 『キネマ旬報』一九二三年九二号、キネマ旬報社、一九二三年、六頁。山室勝之資『父さんあなたの一一番嫌つた芸能界から息子は足を洗いましたよ』生駒雷遊の生涯』山室勝之資、一九九八年、九〇二九頁。

(120) 前掲『芸談』三三六頁。

(121) 日本経済新聞社編『私の履歴書第一四回集』日本経済新聞社、一九六一年、二八六頁。

(122) 徳川夢声「天皇陛下の玉のよくなお人柄」『眞世界』一九六六年一月号、一九六六年、八頁。

(123) 前掲『夢声自伝(上)』四〇五頁。

(124) 前掲『映畫の倒影』四六頁。前掲『人情映画ばか』一五七頁。

(125) 前掲『長野縣勢總覽下巻』七九九頁。前掲『昭和十六年度版日本映畫年鑑』四五頁。

(126) 奈良澤資夫『世界映畫俳優名鑑』キネマ同好會、一九三二年、二八七頁。『キネマ旬報』一九二三年第九五号、キネマ旬報社、一九二二年、一五頁。

(127) 市川彩編『日本映畫事業總覽昭和二年版』國際映畫通信社、一九二六年、廣告欄。

(128) 市川彩『日本映畫事業總覽昭和五年版』國際映畫通信社、一九三〇年、一〇四頁。

(129) 『キネマ旬報』一九三五年春季特別号、キネマ旬報社、一九三五年、二三九頁。

(130) 映画協会と大正活映は興行権を巡り、紛擾騒ぎとなつた。高田俊郎編『映画評論』一九四八年一二月号、一

九四八年、二一頁。

(131) 前掲『キネマ旬報』一九二三年第九五号、一五頁。『東京朝日新聞』一九二三年四月二八日夕刊三面(『朝日

新聞クロスサーチ』)。

(132) 『官報』第一二六六号、一九一六年一〇月一九日、四〇一頁。

(133) 前掲『長野縣勢總覽下巻』七九九頁。前掲『昭和十六年度版日本映畫年鑑』四五頁。

(134) 前掲『世界映畫俳優名鑑』二八七頁。前掲『映画往来』一九二九年新年號、一一七頁。

(135) 前掲『キネマ旬報』一九二三年第九五号、一五頁。『東京朝日新聞』一九二三年四月一四日夕刊三面(『朝日

新聞クロスサーチ』)。『東京朝日新聞』一九二三年四月二八日夕刊三面(『朝日新聞クロスサーチ』)。

(136) 『キネマ旬報』一九二六年第二六号、キネマ旬報社、一九二六年、二六一七頁。

映画界の原真平(松井孝翔)

(137) 『キネマ旬報』一九二六年五月一日号、キネマ旬報社、一九二六年、二六頁。

(138) 『読売新聞』一九二六年六月九日朝刊五面(「ヨミダス歴史館」)。

(139) 『読売新聞』一九二七年五月二一日朝刊五面(「ヨミダス歴史館」)。時事新報社編『時事』年鑑昭和三年

時事新報社、一九二七年、五七五頁。

(140) 『キネマ旬報』一九二七年二月中旬号、キネマ旬報社、一九二七年、一〇頁。『キネマ旬報』一九二七年一

月下旬号、キネマ旬報社、一九二七年、三五頁。

(141) 『読売新聞』一九二八年七月七日朝刊六面(「ヨミダス歴史館」)。

(142) 石巻良夫「イタリーメ画聞記」『キネマ旬報』一九二八年一〇月二二日号、一九二八年、四一頁。

(143) 前掲『日本映畫事業總覽昭和五年版』一〇四頁。

(144) 『キネマ旬報』一九二八年一月二一日号、キネマ旬報社、一九二八年、一二頁。

(145) 荒木利一郎編『映畫教育』一九二八年二月号、大阪毎日新聞社、一九二八年、三三頁。

(146) 前掲「映画人」志賀直三の軌跡—「阿呆伝」などを手がかりに一】一四八頁、一五五頁。

(147) 前掲『日本映畫事業總覽昭和五年版』四八頁。

(148) 前掲『日本映畫事業總覽昭和二年版』資料頁。

(149) 田中三郎編『全國映畫錄』キネマ旬報社、一九三六年、一一、一七頁。

(150) 田中純一郎編『キネマ週報』一九三〇年五月二〇日号、キネマ週報社、一九三〇年、一〇頁。

(151) 前掲『昭和十六年度版 日本映畫年鑑』四五頁。

(152) 『東京朝日新聞』一九二三年一月一九日夕刊三面(「朝日新聞クロスサーチ」)。『キネマ旬報』一九二七年二月

上旬号、一九二七年、八頁。『読売新聞』一九二八年二月一七日朝刊一〇面(「ヨミダス歴史館」)。荒木利一郎編

『映畫教育』一九三一年八月号、大阪毎日新聞社、一九三一年、三八頁。

(153) 矢野誠一「都新聞藝能資料・抄」「新劇」一九八七年六月号、一九八七年、一一二～一一八頁。

(154) 下位春吉『大戦中のイタリヤ』信義堂書店、一九二六年、二二六頁。

(155) 前掲『大戦中のイタリヤ』二〇六～二三四頁。

(156) 石井文作編『日本映畫事業總覽 大正拾五年版』國際映畫通信社、一九二五年、廣告七六頁。

（

(157) 前掲『キネマ旬報』一九二五年第二〇六号、一五頁。前掲『素人に作れる無線電話の實驗』二三～二五頁。

前掲『キネマ旬報』一九二七年七月下旬号、五二頁。前掲『映畫教育』一九三一年六月号、九頁。『讀壳新聞』一

九二八年七月二三日朝刊三面（「ヨミダス歴史館」）。『讀壳新聞』一九二八年九月二三日朝刊五頁（「ヨミダス歴史館」）。

館】。

(158) 『讀壳新聞』一九二七年五月二二日朝刊五面（「ヨミダス歴史館」）。

(159) 前掲『キネマ旬報』一九二七年一月中旬号、一〇頁。前掲『キネマ旬報』一九二七年一月下旬号、三五
頁。

(160) 前掲『イタリー映畫聞記』四一頁。

(161) 『讀壳新聞』一九二八年七月二三日朝刊三面（「ヨミダス歴史館」）。

(162) 『讀壳新聞』一九二八年二月一七日朝刊一〇面（「ヨミダス歴史館」）。『讀壳新聞』一九二八年七月七日朝刊六
面（「ヨミダス歴史館」）。『讀壳新聞』一九二八年九月二三日朝刊五面（「ヨミダス歴史館」）。

(163) 前掲『日本映畫事業總覽 昭和五年版』三〇二～三〇三頁。

(164) 『讀壳新聞』一九二八年七月七日朝刊六面（「ヨミダス歴史館」）。前掲『キネマ旬報』一九二八年一月一
日号、一二頁。『キネマ旬報』一九三〇年七月二十五日号、キネマ旬報社、一九三〇年、五頁。

(165) 『讀壳新聞』一九二八年七月二三日朝刊三面（「ヨミダス歴史館」）。

(166) 前掲『活辯時代』一二三～一二四頁。前掲『活動写真弁史』三八七～三九八、四〇四～四〇七頁。

映画界の原真平（松井孝翔）

(167) 「キネマ旬報」昭和一九三〇年五月三〇日号、キネマ旬報社、一九三〇年、一〇頁。

(168) 「キネマ旬報」昭和一九三二年五月六日・第一〇八号、キネマ旬報社、一九三二年、三四頁。

(169) 前掲「天皇陛下の玉のようなお人柄」八、一四頁。なお原氏は日蓮主義グルーピに所属していたことが知られているが、昭和一六年（一九四二）九月二七日発刊の著書『總力戰研究資料第六輯 前第五輯の續稿 祭政一致と日蓮義』では日蓮主義や国柱会を批判している。原眞平『總力戰研究資料第六輯 前第五輯の續稿 祭政一致と日蓮義』大日本經濟研究所、一九四一年、一三〇一四頁。法華宗宗門史編纂委員会編『法華宗宗門史』法華宗（本門流）宗務院、一九八八年、四二八～四三〇頁。

(170) 前掲『昭和十六年度版 日本映畫年鑑』四五頁。

(171) 原氏は昭和一九年一一月一日、京都の石田音吉邸において、山梨県特高課堀内氏によつて検束され、中立壳署を経て山梨県甲府警察署に留置される。後に栄養失調が原因となり、昭和二〇年六月一日、山梨県立医学専門学校附属病院において病死する。法華宗『本門法華宗教義綱要事件概要』一三頁〔※筆者注、戦後関係者によつて作成された資料〕。前掲『伊那の芸能』一九一～一九二頁。

(172) 前掲『人情映画ばか』一五七頁。

(173) 前掲の『活動写真弁史』には原氏の没年を記しているが、その没年は一九五四年となつていて。前掲『活動写真』五五〇頁。

(174) 前掲(六)「群像」六八頁。

(175) 愛善苑教学委員会『世界更生①』あいぜん出版、一九九四年、四〇～四四頁。

(176) 前掲(六)「群像」六八頁。

(177) 大本七十年史編纂会編『大本七十年史』下巻、宗教法人大本、一九六七年。

(178) 『眞如の光』一九三五年みろく大祭号、天聲社、一九三五年、一七頁。『眞如の光』一九三五年八月一七・二

五日合併号、天聲社、一九三五年、二三頁。

(179) 公安調査庁『戦前における右翼団体の状況 下巻(その一)』公安調査庁、一九六五年。

(180) 映画部会計を務めた松川陸一は「東京の二子玉川の川上貞奴劇団跡に、昭和神聖会映画部が出来た」と述べている。松川陸一『天心』松葉会、一九三六年、九頁。

(181) 前掲『戦前における右翼団体の状況 下巻(その一)』一〇一～一〇三頁。

(182) 前掲『眞如の光』一九三五年みろく大祭号、一七頁。

(183) 前掲『大本七十年史 下巻』二四六～二四七頁。

(184) 前掲⑥『群像』六八頁。

(185) 前掲『眞如の光』一九三五年八月一七・二五日合併号、一三三頁。前掲『大本七十年史』下巻、二〇一～二〇二頁。

(186) 「靈界物語小辞典」では「言靈」を「神から出る言葉。神に通ずる言葉。」としている。木庭次守『靈界物語ガイドブック』八幡書店、二〇一〇年、五〇頁。

(187) 「靈界物語小辞典」では「生言靈」を「主神瑞靈神の神徳のみちた言葉。」、「神から出る言葉。神に通ずる言葉。」と表記している。前掲『靈界物語ガイドブック』一一頁。

(188) 前掲『戦前における右翼団体の状況 下巻(その一)』一〇三～一〇六頁。

(189) 前掲『大戦中のイタリヤ』二〇一～二三四頁。川田真弘『下位春吉とイタリア・ファシズム』(上垣外憲一編『一九三〇年代東アジアの文化交流』思文閣出版、二〇一三年)六九～七八頁。

(190) 前掲『人情映画ばか』一五七頁。

(191) 下位春吉『お嘶のしかた』同文館、一九一七年、一九九頁。

(192) 藤岡寛己『下位春吉の行動と思想—昭和神聖運動への参加』『イタリア圖書』四八号、二〇一三年四月二八日、

一九〇二三頁。

(193) 前掲『眞如の光』一九三五年みろく大祭号、一七頁。前掲『眞如の光』一九三五年八月一七・二五日合併号、一二三頁。

(194) 前掲『眞如の光』一九三五年みろく大祭号、一七頁。前掲『眞如の光』一九三五年八月一七・二五日合併号、一二三頁。前掲『戦前における右翼団体の状況 下巻(その一)』一〇二頁。

〔付記〕

まず初めに、原真平氏や原家に関する調査や写真の掲載にご理解をいただいた、御遺族の原真一様には心より感謝を申し上げます。

本稿は、令和四年度法華宗教学研究所総会（令和四年九月七日）において口頭発表した「原真平氏についての一考察——生い立ちや青年期を中心にして」をもとに、当日に頂いた御指摘をふまえた上で新たに収集した資料を加えて、改めて論じたものです。本稿の内容は、昭和法難以前における原真平氏の前半生という、興隆学林専門学校に提出した平成二七年度卒業論文「原真平氏の一考察」では全く扱えなかつた領域のものとなりました。しかしながら、本稿の出発点となつたのはやはり卒業論文であり、その卒業論文の作成時には主査の大平宏龍先生、副査の株橋祐史先生、論文指導の三浦和浩先生に御指導を賜り、また様々な方より昭和法難に関する知識を御教示を頂きました。

本稿作成の動機となつたのは、学林卒業時から大平宏龍先生より常々この研究の意義と重要性、法華宗における原氏の存在意義について説いて下さりながら、多くの御教示を頂いたことがあります。また大本山本興寺御貫首の小西日遼猊下には、卒業論文作成時の頃から、所持しておられる昭和法難に関する多くの資料や宗門史上の逸話などを細部にわかつて親しく御教示賜りました。さらに中村日珠上人、株橋祐史先生、井原本憲紹先生には、昭和法難についてその都度御教示頂き、三吉廣明上人には梅屋庄吉や孫文に関する資料を紹介頂き、興隆学林専門学校司書の今川八千代先生には資料収集などで御協力下さいました。また宗務総長金井孝顯台下、小笠原日堂上人の御息女松本恵春上人（和子様）、

読売新聞社様には、本稿における原氏の写真の引用掲載につきまして、御協力ならびに御許可を頂きました。そして本稿執筆に当たっては、大平寛龍先生より、大正・昭和初期の『キネマ旬報』などの映画雑誌や『読売新聞』『東京朝日新聞』の藤浪無鳴に関する記事・写真が近年にデジタル化され「国立国会図書館デジタルコレクション」「ヨミダス歴史館」「朝日新聞クロスサーチ」で閲覧できることを、孫文や下位春吉に関する一部の文献（特別展「孫文と梅屋庄吉—一〇〇年前の中国と日本」、川田真弘「下位春吉とイタリア・ファシズム」、藤岡寛己「下位春吉の行動と思想—昭和神聖会への参加」とともに御紹介頂き、また丁寧な御指導を親身に受けながら、最後まで書き進めることができました。ここに記して、衷心より感謝申し上げます。

なお、本稿の出発点となつた卒業論文にとりかかつた頃から、筆者に親しく資料の御紹介や御教示、励ましを賜つた大本山光長寺第七八世の石田日信上人の御生前中に成稿できなかつたことは、大変悔やまれます。ここに謹んで日信上人の自受御法楽を御祈念申し上げます。

〈キーワード〉 昭和法難 教義綱要事件 原真平 藤浪無鳴 活動弁士 日活 昭和神聖会 下位春吉

「原真平と映画界」関係年表

松井孝翔
編

明 治								和暦
39	37	36	28	27	22	20	13	
1906	1904	1903	1895	1894	1889	1887	1880	西暦
6	2		8		2	8		月
	10		1		11	4		日
19	17	16	8	7	2	0		年齢
		原氏、旧制飯田中学を卒業、 家業に従事する。				原氏、長野県下伊那郡飯田町 に恤造・兼子の長男として誕 生。		原真平・映画協会関係
写真会を創立。 梅屋、この頃M・パテー活動								映画界関係
	日露戦争勃発。	恤造、下伊那郡飯田町 九八一番地に居住。	日清戦争勃発。	この頃、原家は乳業を 生業としている。	大日本帝国憲法發布。		下伊那地方に初めて乳 牛がもたらされ、父・ 原恤造が関わる。	その他・備考

大正

2		
1913		1912
7		9
1		17
26		25
原氏、渋谷に新居を構える。 原氏、日活より翻訳係として 辞令を受ける。	原氏、横浜ゲート座での出 来事をきっかけに一念発起し 猛勉強を開始。	原氏、この頃伊藤伊八と知り 合い横田商会へ移籍。
原氏、帝国劇場でイタリア映 画『ボンベイ最後の日』『ク オバチス』、浅草で『クオ・ ヴァヂス』の弁士。		エム・パテー、横田商会、吉 沢商店、福宝堂が統合し日活 となる。
下位、原氏の『ボンベイ最後 の日』の説明を評価。		
長男慎が二歳で死去。		

大正							
7	6	5	3				
1918		1917		1916		1914	
4	2	7	3			8	7
24~17	17~16	下旬				23	28
31		30		29		27	
原氏、個人で文部省社会教育局より『クオレ』(全五巻)の活動写真フィルム認定を得る。内容は『勇敢ナル少年』(一巻)、『母ヲ尋ネテ三千里』(三巻)、『難破船』(一巻)。	原氏、帝国劇場で夢声と『シビリゼーション』の弁士。	原氏、相模常設館で『忍術十勇士』『首賣勘助』『女夫心中』『疑問の墓』の弁士。	夢声、『シビリゼーション』公開の翌週より葵館で前説を廃し評価される。				
米沢市常盤館で武蔵野館主任弁士として『シビリゼーション』の弁士。	神田青年会館で櫻井南城と共に弁士。						第一次世界大戦勃発。 日本、ドイツに宣戦布告。

大正						
12	11			9	7	
1923	1922			1920	1918	
	4	3	1	12	11	9
		11	27	17	11	上旬
36	35			33	31	
原氏、評論「第八藝術の出生」を発表。	原氏、映画協会を設置。 映画協会、「散り行く花」を 大正活映と共同興業。	原氏、横浜市南太田町一四五 七番地に映画協会を創設、主 幹原氏、主事小林勇吉就任。	原氏、「散り行く花」の買 付け。	原氏、大正活映の東洋キネマ で『歌劇ルクレツィア』、『駒 鳥の舞』『ハリエット・アン ド・バイパー』『マダムX』 の弁士。	牛込館で『オデット』の弁士。	
					妹貞枝二三歳で死去。	第一次世界大戦終結。

大正					
14		13		12	
1925		1924		1923	
4	3		3		9
	10		14		1
38		37		36	
原氏、帝国劇場で『ダンテ地獄篇』の弁士。	原氏、この頃に武蔵野館において樂士長の毛谷平吉と喧嘩となり、二人は退館処分となる。	原氏、武蔵野館の『ブローカン・プラッサム』で弁士。	原氏、武蔵野館で論文「活動写真（シネマグラフト）術とはなんぞ」を配布。	原氏、関東大震災後に大阪へ移る。	関東大震災発生。
キネマ・タチバナで『パグダッドの盜賊』の弁士。	原氏、この頃下位のイタリア渡航に同行、六月スエズ運河を経由しマルセイユへ到着、汽車で移動し同月八日にイタリアへ到着し五ヶ月間滞在しムツソリーニと会談する。				

昭 和		大 正				
2	1	15			14	
1927		1926			1925	
		12	6	5	1	9 6
		25		1	21	30~26
40		39			38	
映画協会、標語として「映畫報國・事業奉仕」、事業内容として「伊太利映畫界への紹介 優秀映畫の輸入並配給」を掲げる。	映画協会、イタリアより哉リツツオ艇長』を輸入。『偉	映画協会、『キネマ旬報』に『アルツイゴーゴー』を『虹を踏む者』と改名して映画広告を掲載。	映画協会、『キネマ旬報』に『アルツイゴーゴー』を『虹を踏む者』と改名して映画広告を掲載。	映画協会、『キネマ旬報』に『アルツイゴーゴー』を『虹を踏む者』と改名して映画広告を掲載。	原氏、下位と共にグラッパ地方を訪れる。	原氏、日帝國劇場で『オペラの怪人』の弁士。
(トーキー映画) が登場。		大正より昭和に改元。				

昭 和						
3	2					
1928	1927					
	11	9	8	6	3	
	18	5	28	29	11	
41	40					
ソリーニ』を上映。	原氏、『アルツィゴーゴロ』のラジオ説明。	神戸朝日館で下位が監修し原氏と大橋玄鳥が共に編集した『ムツソリーニ』(全一一巻)が上映。	武蔵野館・帝国劇場で『ムツソリーニ』を上映。	原氏、『アルツィゴーゴロ』のラジオ説明。	イタリアへ前掲の映画を輸出。	原氏、横浜高等工業学校主催の映画会で『百萬人に一人の男』『野生の叫び』の弁士。
日本映画界に発声映画(トーキー映画)が輸入。						父恤造が七四歳で死去。

昭和

3

1928

11	9	7	3	2		
	22	23	16		15~14	

41

映画協会、ムツソリーニが総裁を務めるルーチエ映画会社と契約、同社作品の三年間の独占配給権を得る。	映画協会、イタリアビツタルガ社と契約。	原氏、全日本活映教育研究会関西本部の講習会に講師として参加。	原氏、この頃より七月にかけて二度目のイタリア渡航。	映画協会、東京日本橋ビルに事務所を設置。	原氏、よみうり東京ラジオで『ムツソリーニとライオン』の説明。	原氏、よみうり東京ラジオで『ベン・ハ』の説明。	映画協会、この頃『ヴェニスの謝肉祭』(全一二卷)『フラン・デアポロ』(全一二卷)『ヴェニスのパン屋』をイタリアより輸入。他三本

昭 和				
6	5	4	3	
1931	1930	1929	1928	
7	5	8	4	
9	7	25	24	
44	43	42	41	
原氏、文部省社会教育局との懇親会に出席。 員に就任。	原氏、全日本映画業組合評議	原氏、内幸町大阪ビル「小笠原明峰渡米送別会」で小笠原長生と共に「日蓮上人に関する講演」。	映画協会、アントニオモスコ商会の日本總代理店として昭和四～五年に欧州映画一六作品の輸入を発表。	映画協会、輸入した『モンテ・クリスト』が太秦映画社の配給に内定。 映画協会、泰西映画社と提携し『巖窟王』を輸入。

昭 和					
10	9	7			
1935		1934		1932	
3	11	10	5	3	
	10	1	15	5	
48	47	45			
原氏子息、法雄が映画協会に 加わる。	『東京日日新聞』に浅井要麟 編『昭和新修日蓮聖人遺文』 に不敬箇所があると内務省が 問題視、削除命令が出された と報道。	内務省警保局より日蓮 聖人遺文に対する不敬 箇所が指摘される。	五・一五事件。	血盟団事件。	原氏、公益奉仕機関として大 日本映画奉公協会を創立。
原氏、大本の映画機材を用い た布教に賛同、所有する元舞 踊研究所の建物を神聖会に無 償提供。	三月以降、大本が神聖会によ る映画機材を用いた布教活動 を計画。				

昭 和							
11	10						
1936	1935						
	9	8	7			6	5
		上旬		26		1	中旬以降
49		48					
原氏、渋谷区幡ヶ谷本町一ノ九〇に住居を構え、映画協会は東京市渋谷区幡ヶ谷一ノ九を住所とする。	原氏、映画部他幹部と対立、原氏に対する排斥運動が起る。	原氏、映画部は幹部が引責辞任し解散する。	王仁三郎が監督を務める映画新劇部が設置。	映画部は幹部が引責辞任し解散する。	女』他二作を完成。	この頃、映画部は『皇軍と少女』	神聖会、原氏から無償提供された建物を改修工事。所式を行う。
							神聖会、映画部の鎮座祭、開

昭和									
17					16				
1942					1941				
8	4		12	9	5				
1	25	24	23		8	27			
	55		54						
原氏、事件関係者と比叡山無	原氏、会談を終え帰京する。	原氏、本能寺において事件関係者と終日会談する。	原氏、本能寺に向けて出発。			原氏、『總力戦研究資料第六輯 前第五輯の續稿 祭政一致と日蓮義』を発刊。			
						日本、第二次世界大戦に参戦。			
						この頃、藤田師が原氏の自宅を訪問、事件への協力を要請。			
							この頃、藤田師が検束。		
								師・松井正純師・株橋諦秀師・小笠原日堂師・泉智亘師の六名が検挙。	

動寺谷において七日間の遺文
研究を行う。

昭和			
35	20	19	17
1960	1945	1944	1942
8	6	11	8
15	11	11	1
	58	57	55
原氏、山梨県立医学専門学校 附属病院において病死。			
山野一郎、「仏教に造詣の深い無鳴は、現在は僧職にあって、日蓮宗某寺の住持、平和に余生を送つていてるとか」と著書で述べる。	第一次世界大戦終結。		

※筆者注 「年月」は明確な場合のみ表記した。また年表内で表記した出来事は本稿引用資料並びに、大阪府豊中市藤井寺所蔵過去帳、国立国会図書館電子展示会「史料にみる日本の近代」(<https://www.ndl.go.jp/modern/utility/chronology.html>)を参照した。